

金嶺寺遺跡出土瓦の研究

清野孝之 川畑 純 今井晃樹 石田由紀子 森先一貴

1. 調査の経緯

(1) 調査の概要

遼寧省文物考古研究所との国際共同研究事業「遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究」の一環として、遼寧省北票市の金嶺寺遺跡から出土した瓦の調査をおこなった。調査は2011年11月、2012年3月、2013年11月、2015年3月の4回にわたり、清野孝之、川畑純、今井晃樹、石田由紀子、森先一貴が瓦の観察、実測、拓本を、栗山雅夫が写真撮影をおこなった。その概略は一度紹介したところである（小池・川畑・清野・森先・諫早2014）。本稿ではその後の調査成果を含め、われわれが調査した金嶺寺遺跡出土瓦について、製作技法を中心に論じ、注目される点などを検討する⁽¹⁾。

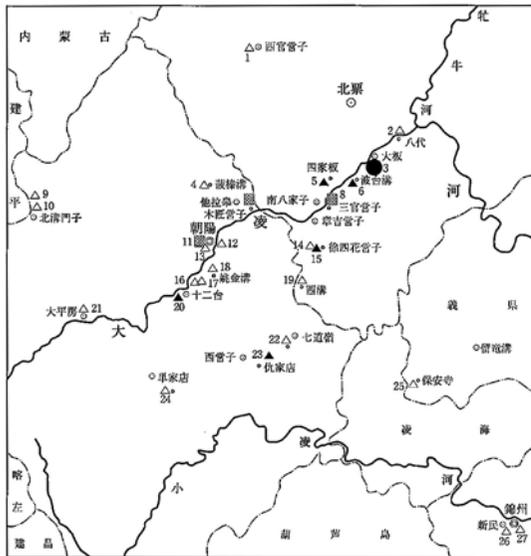
(2) 金嶺寺遺跡の概要

中国東北地方の遼河以西、現在の遼寧省西部は遼西地域と呼ばれ、五胡十六国時代に該当する4世紀前半から5世紀前半にかけての約100年間、慕容鮮卑族や漢族によって建国された前燕(337~370)、後燕(384~407)、北燕(407~436)の中心地の一つとなった。これら三国は三燕と総称され、遼西地域の当該期は三燕時代と呼ばれている。

金嶺寺遺跡は、遼寧省北票市の南、大板鎮金嶺寺村の近郊に所在する。同じ大凌河南岸の南西には、田立坤氏が棘城(294年から龍城へ遷都する349年までの慕容鮮卑の本拠地)に比定している北票章吉營子郷三官營子村の三官營子遺跡(田立坤1996)、その対岸に慕容鮮卑の4世紀初~5世紀の墳墓群である喇嘛洞墓地がある(図1)。

金嶺寺遺跡は、1992年に白石ダム建設にともなって発見され、2000~2002年に9000㎡の発掘調査がおこなわれた。その調査成果は2010年に辛岩氏、付興勝氏、穆啓文氏によって「遼寧北票金嶺寺魏晋建築遺址発掘報告」としてまとめられた(辛岩・付興勝・穆啓文2010。以下、『報告』と呼ぶ。以下、金嶺寺遺跡の概要は『報告』の文章記載および挿図による)。その結果、南北と東を濠に囲まれた(西は大凌河に削られ不明)やや不整形な長方形の区画内に、整然と並ぶ3つの建物群(「院落」)が確認された(図2)。

このうち、残りの良い東北部の建物群(「第一組建築」)は、区画塀に囲まれ南に門が開く南北26.5m×東西10m前後の長方形の区画が5組、東西に連結し(全体の東西幅52.8m)、



1. 漢崇佛墓 2. 倉糧倉墓 3. 金嶺寺建築群跡 4. 軍軍製附墓 5. 解縣尉墓 6. 大板管子墓
7. 東田山子、西田山子遺跡(砲跡) 8. 三官管子遺跡 9. 東山墓 10. 北殿墓 11. 砲城跡
12. 八宝墓 13. 医M13 14. 房身墓 15. 房身北溝墓 16. 袁台子墓 17. 袁台子壁面墓
18. 崔潘溝 19. 西溝墓 20. 十二台砲城跡 21. 大平房墓 22. 三合成墓 23. 龍草溝墓
24. 榆樹溝墓 25. 保安寺墓 26. 前山墓 27. 李塚墓

凡例：○遺跡跡、建築跡、城跡 △墓 ▲墓地

図1 金嶺寺遺跡の位置

それぞれの区画内には、一辺6.5m前後の正方形の基壇上に1×1間(柱間寸法3.0~3.9m)の建物を配する。基壇の南辺には長さ約3m、幅1.1~1.4mの斜路がとりつく。建物の柱穴には礎石がなく、柱を直接据え、堅く突き固めながら埋め戻す(「孫墩」。建物基壇の北西側、南辺の門からみて建物の背面側には、板石を組み合わせた石槽を配する。石槽内から、焼土、炭、灰と焼けた獣骨が出土している。

それぞれの区画内には、一辺6.5m前後の正方形の基壇上に1×1間(柱間寸法3.0~3.9m)の建物を配する。基壇の南辺には長さ約3m、幅1.1~1.4mの斜路がとりつく。建物の柱穴には礎石がなく、柱を直接据え、堅く突き固めながら埋め戻す(「孫墩」。建物基壇の北西側、南辺の門からみて建物の背面側には、板石を組み合わせた石槽を配する。石槽内から、焼土、炭、灰と焼けた獣骨が出土している。

東部の建築群(「第三組建築」)は、北辺、西辺の区画塀が、それぞれ、東北部の建物群の南辺、東辺の区画塀と一連になっている。塀に囲まれた東西に長い長方形の区画が、南北に3組連結する。門は西辺に開き、建物は南北に長い基壇上に、2×1間の南北棟を配する。基壇の西辺には斜路がとりつく。建物基壇の北東と南東、西辺の門からみて建物の背面側に板石組の石槽を配する。

西北部の建物群(「第二組建築」)は、東北部の建物群(「第一組建築」)の西側に若干の間隔を空け、東西軸をほぼ揃えて配される。配置は東北部の建物群に似るが、西側が大凌河によって大きく削られ不明な点が多い。

各区画の建物基壇や門の周囲から大量の瓦が出土しており、建物や門などが瓦葺きであった可能性を示唆する。一方で土器の出土量は非常に少ない。

金嶺寺遺跡の年代と性格について、『報告』では、出土遺物から晋代後半には下らず、魏・晋の境ごころの時期とされている。また、石槽内から焼土、炭、灰と焼けた獣骨が出土したことから、金嶺寺遺跡は何らかの祭祀に関連する施設と推定している。

なお、本遺跡の年代と性格について、王飛峰氏は、『晋書』慕容垂載記にみえる、慕容垂が「繕宗廟社稷」したとの記事に関連する建築群と推定する(王飛峰2012)。田立坤氏は、1996年の論考において、『十六国春秋』前燕録にみえる、慕容鮮卑の莫護跋が景初二年(238)に司馬懿の公孫淵討伐に協力し、その功により率義王を拜命し、棘城の北に建国した(「始建国于棘城之北」)との記事にある「棘城之北」と関係する遺跡と推定した(田立坤1996)。そして2014年の論考では、金嶺寺遺跡を『晋書』慕容儁載記にみえる、前燕で最

初に皇帝を称した慕容儁が昌黎に営んだ祖父、慕容廆の廟に比定している（田立坤2014）。

（3）金嶺寺遺跡出土瓦に関する先行研究

三燕時代や金嶺寺遺跡出土の瓦に関する先行研究は多くない。

李新全氏は、三燕時代の軒丸瓦について文様の分類や年代比定をおこなっている（李新全1996）。三燕時代の軒丸瓦について、北魏や高句麗集安地域の類例との比較を踏まえ、本格的に検討しただけでなく、三燕時代の都城である龍城に比定される、遼寧省朝陽市内などで出土ないし採集された貴重な資料を数多く取り上げており、重要な研究である。ただし、その分析対象は瓦当文様であり、製作技法の分析はおこなわれていない。

万雄飛氏、白宝玉氏は、朝陽市の朝陽北大街から出土した軒丸瓦について、金嶺寺遺跡出土瓦とまったく同じものがあることを指摘している（万雄飛・白宝玉2006）。そしてその瓦の年代を前燕代または後燕代としている。

桃崎祐輔氏は、高句麗の蓮蕾文軒丸瓦の祖型として、龍城の三燕時代の蓮蕾文軒丸瓦を取り上げ、龍城建設の341年を上限とし、焼亡の436年を下限とする三燕時代の宮殿瓦はすべて蓮蕾文軒丸瓦であったと推定している（桃崎2005・2009）。その中で金嶺寺遺跡出土軒丸瓦も紹介しており、「6弁に蜘蛛の巣状の意匠を複合した蓮蕾文瓦」が出土し、「三燕（後燕～北燕か）の宮殿瓦」（桃崎2005：104頁）と説明している。しかし、これらの製作技法については触れていない。

中村亜希子氏は、金嶺寺遺跡出土軒丸瓦の製作技法に触れ、模骨によって成形した粘土円筒に瓦当部粘土を接合し、円筒不要部を切り取る技法（中村氏の「模骨成形技法+A接合技法」）で製作された軒丸瓦が金嶺寺遺跡で大量に出土することから、これが遼寧一帯に特有の技法と位置づけている（中村2012）。また、高句麗の蓮蕾文軒丸瓦との関係については、「遼寧省出土の蓮蕾文軒丸瓦が古式で、4世紀半ばから後半頃に高句麗にもたらされた」としている（中村2012：103頁）。

王飛峰氏は、三燕時代の軒丸瓦について、文様、製作技法を含め分析、検討をおこなった（王飛峰2012）。金嶺寺遺跡についても分析対象としており、瓦当文様の分類は、『報告』を踏襲する。ただし、遺跡の年代については、出土した土器を後燕の建興十年（395）の石刻墓表が出土した崔遙墓出土品に近いものとし、395年かやや遅れる時期に位置づけ

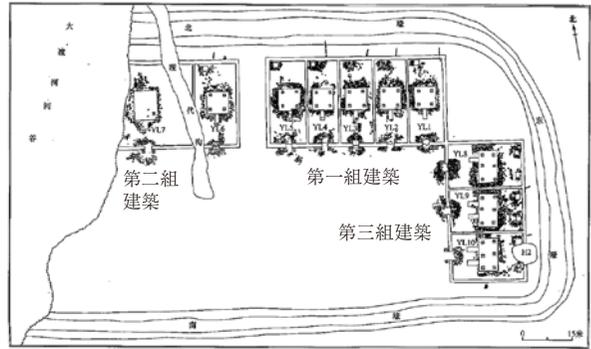


図2 金嶺寺遺跡平面図

る。これを踏まえ、金嶺寺遺跡を『晋書』慕容垂載記にみえる、慕容垂が皇帝を称し建興に改元して「繕宗廟社稷」したとの記事に関連する建築群と想定している。

王氏は、三燕時代の軒丸瓦の製作技法について詳細な検討をおこなっている。その内容はわれわれの調査成果と共通する部分が多いものの、一部、異なる部分がある。そこで、まず、われわれの調査成果を説明した後に、あらためて王氏による製作技法の検討内容について触れたい。

田立坤氏は、金嶺寺遺跡出土の瓦当面を四分割する軒丸瓦と、6分割し地紋を飾る軒丸瓦の2種類が、いずれも五胡十六国時代の前燕龍城から出土していることから、金嶺寺遺跡の年代は、龍城造営を開始する東晋咸康七年(341)を上限とすると推定する(田立坤2014)。また、金嶺寺遺跡では瓦当面を6分割する軒丸瓦が絶対多数を占めるが、龍城では4分割のものの方が多くを占めること等を指摘した。このほか、金嶺寺遺跡出土の小礎石と土器についても類別と比較検討し、金嶺寺遺跡の年代は341年を上限とし、下限を後燕時期と推定した。また、金嶺寺遺跡の年代観と立地が『晋書』慕容儁載記にみえる昌黎に慕容廆の廟を営んだとする記述に合致すること、遺構、遺物の特徴から特殊な礼制建築であり、廟と推定して矛盾がないことを指摘した。金嶺寺遺跡の年代と性格について文献と遺構・遺物から検討した重要な研究である。

2. 金嶺寺遺跡出土瓦の検討

われわれが調査した金嶺寺遺跡出土瓦は58点で(このほかに未調査の軒丸瓦が2点、丸瓦が1点、ヘラ書き瓦が2点ある)、その内訳は軒丸瓦46点、丸瓦9点、平瓦2点、軒平瓦1点である。軒平瓦以外はいずれも三燕時代のものと考えられ、焼成が良好で、灰色から灰褐色を呈し、胎土は精良で直径0.2cm以下の白色粒を少量含むなど、胎土、焼成、色調の

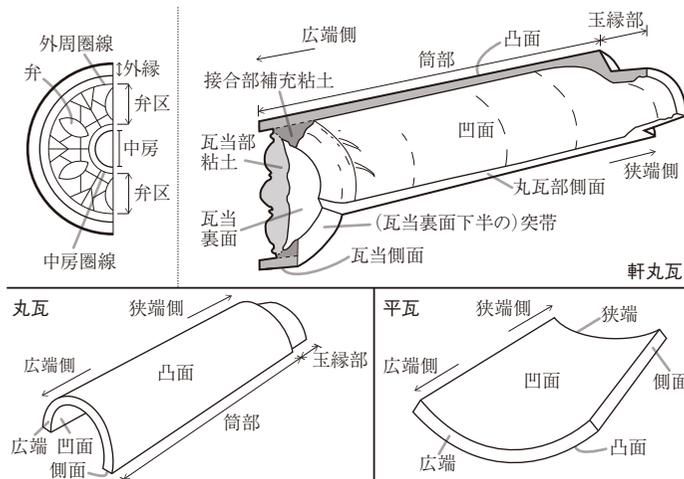


図3 瓦と文様の各部名称

特徴がほぼ共通する。軒平瓦は明らかに時期が異なるもので、遼代ごろのものであろう(図版4-3)。

以下、金嶺寺遺跡出土の三燕時代の瓦について、文様と製作技法の特徴を説明し、製作技法の復元をおこなう。ただし、ここで示すの

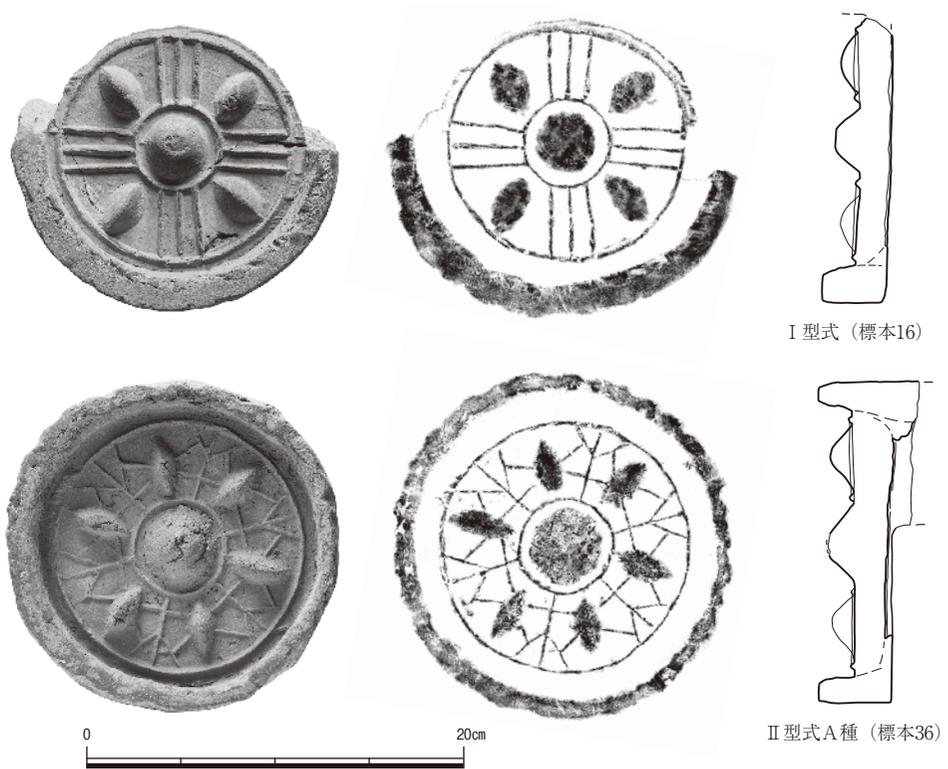


図4 I型式・II形式A種(縮尺1/4)

は瓦の標準的な技法であり、工程を一部省略したものなど少数の例外も存在する。瓦と文様の各部名称は図3のとおりである⁽²⁾。以下の記述では、基本的に軒丸瓦、丸瓦、平瓦ともに長軸に平行する方向を縦、長軸に直交する方向を横と表現する。また、半截前の丸瓦部を粘土円筒として呼び分けることとする。

(1) 軒丸瓦

軒丸瓦は46点、このうち瓦当部粘土が完全に剥離するもの2点、瓦当外縁のみの破片1点の計3点は瓦当文様が不明で、残る43点はいずれも蓮蕾文軒丸瓦である。これらは一定方向に範傷や範割れを生じており、いずれも木製範によって施文されたことが明らかである。

さて、蓮蕾文43点中の1点は、3条1組の輻線によって弁区を4分割し、各1弁の蓮蕾文を配する四弁蓮蕾文で、『報告』では、「三欄四界格四弁蓮華文」と呼んでいる。残る39点は六弁蓮蕾文で、1本の輻線によって弁区を6分割し、『報告』では「単欄六界格六弁蓮華文」と呼んでいる。この六弁蓮蕾文は、輻線と共に、そこから派生する複雑な幾何学的文様を配し、『報告』では幾何学的な葉文をもつ「幾何蓮弁文」と表現している。『報告』では、この幾何学文様によってAからD類に分類し、C類をさらにC1からC3類に細

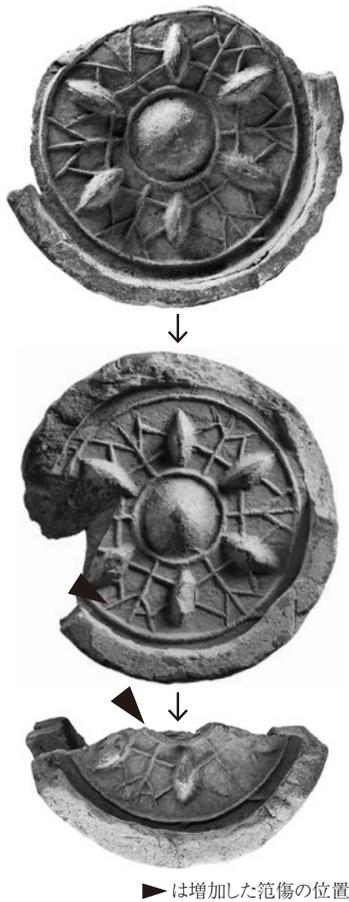


図5 II型式A種の範傷進行
(上：標本25、中：標本8、下：標本35)

分している。

今回のわれわれの調査では、『報告』の分類を踏まえつつ、金嶺寺遺跡出土軒丸瓦を範単位で分類した結果、10種類に細分することができた（未調査の1点は異範の可能性が高く、金嶺寺遺跡出土軒丸瓦は使用された範単位で11種に分けることができると考えられる）。そこで、弁数によりI型式（四弁）、II型式（六弁）に大きく分け、II型式を範ごとにA種からI種（未調査の仮J種を加え10種）に細分する。

なお、II型式A種をIIAと略称し、他種もこれに倣う。以下、この分類にしたがい、各型式・種の特徴と製作技法等を説明する。各型式・種に該当する個体の標本番号（『報告』では「BD〇」と表現されている番号）、法量、そのほかの事項は、文末の表1にまとめて記載する。

a. 文様による分類

① I型式（1点）（図4上、図版1-1）

四弁蓮蕾文軒丸瓦。3条1組の輻線で弁区を4分割し、各1弁の蓮蕾文を配する。中房は半球形気味の円錐形であるが、頂部にはわずかに平坦面をもつ。中房周囲に圏線をめぐらせ、弁区外側にも外周圏線がめぐ

る。範は瓦当外縁の内側（外周圏線外側の0.3~0.5cm程度）までおよぶが、外縁にはかぶらない。

② II型式（42点）

六弁蓮蕾文軒丸瓦。1本の輻線で弁区を6分割し、各1弁の蓮蕾文を配する。中房の断面形はいずれも頂部に丸みをもつ半球形気味の円錐形であるが、粘土の範詰めが不十分なためか、形が崩れ気味のものもある。I型式と同じく中房周囲には圏線（中房圏線）をめぐらせ、弁区の外側にも外周圏線がめぐ。範もI型式と同じく、瓦当外縁の内側（外周圏線外側の0.5cm程度）までおよぶが、外縁にはかぶらない。輻線から派生する蓮蕾文間の幾何学文によりAから仮Jの10種に細分する。

A種（14点）（図4下、図版1-2）『報告』のA類に該当する。蓮蕾文間の幾何学文の外側が「M」字状を呈する。蓮蕾文間を直線で繋ぎ、中房圏線の外側で六角形をなす。瓦当面に多数の範傷を生じているが、一部の範傷について、ないものからあるものへの範傷進

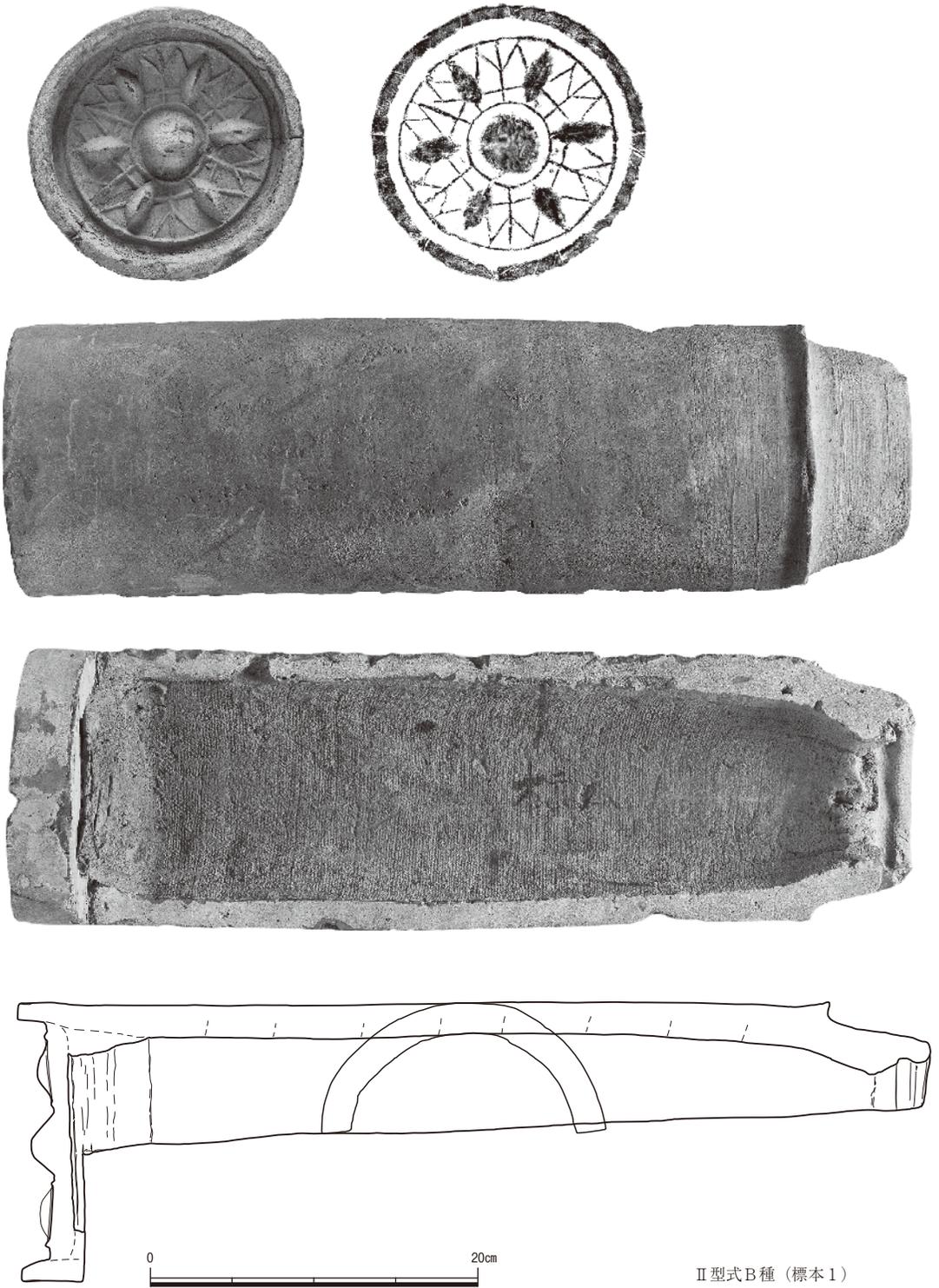


図6 II 型式B種 (1) (縮尺1/4)



Ⅱ型式B種 (標本⑥)

図7 Ⅱ型式B種 (2) (縮尺1/4)

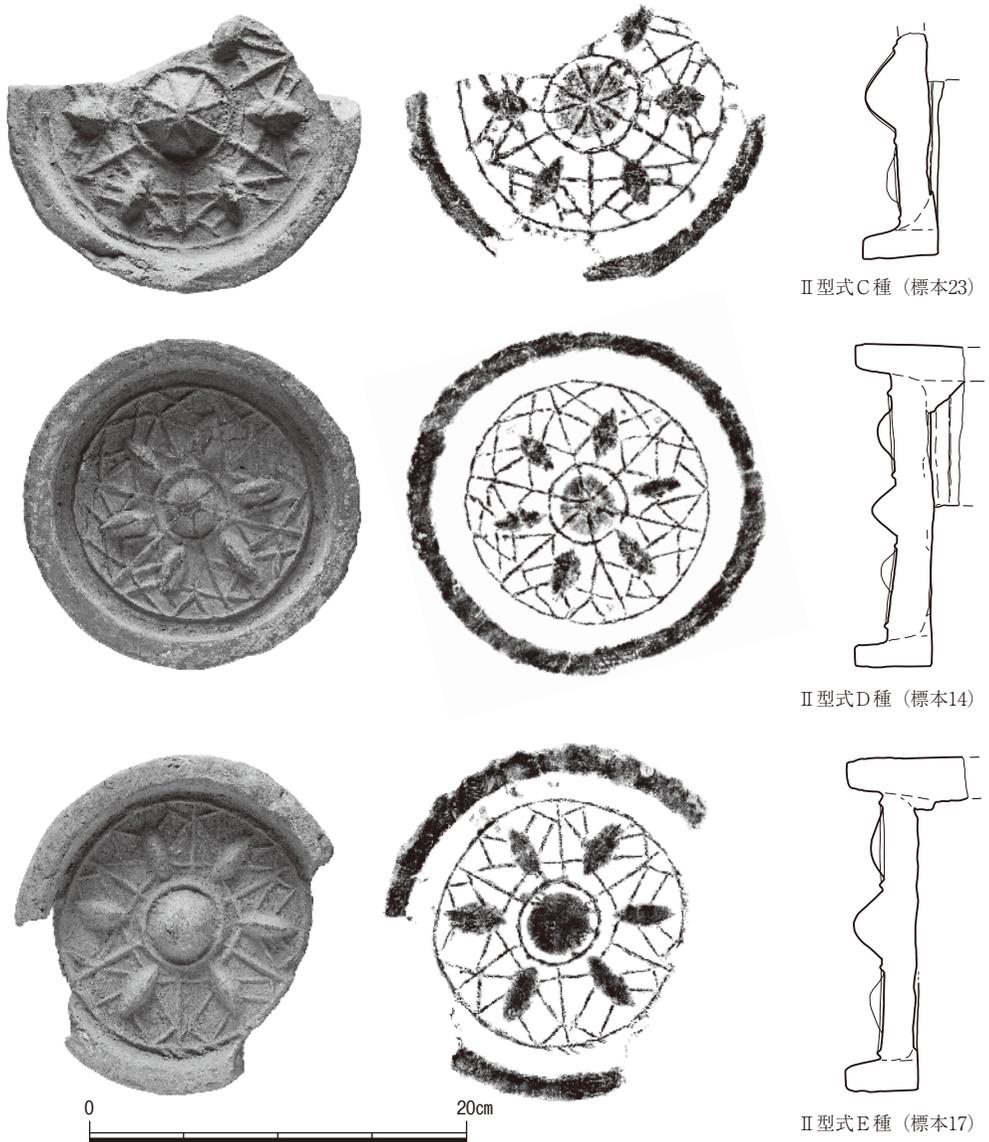
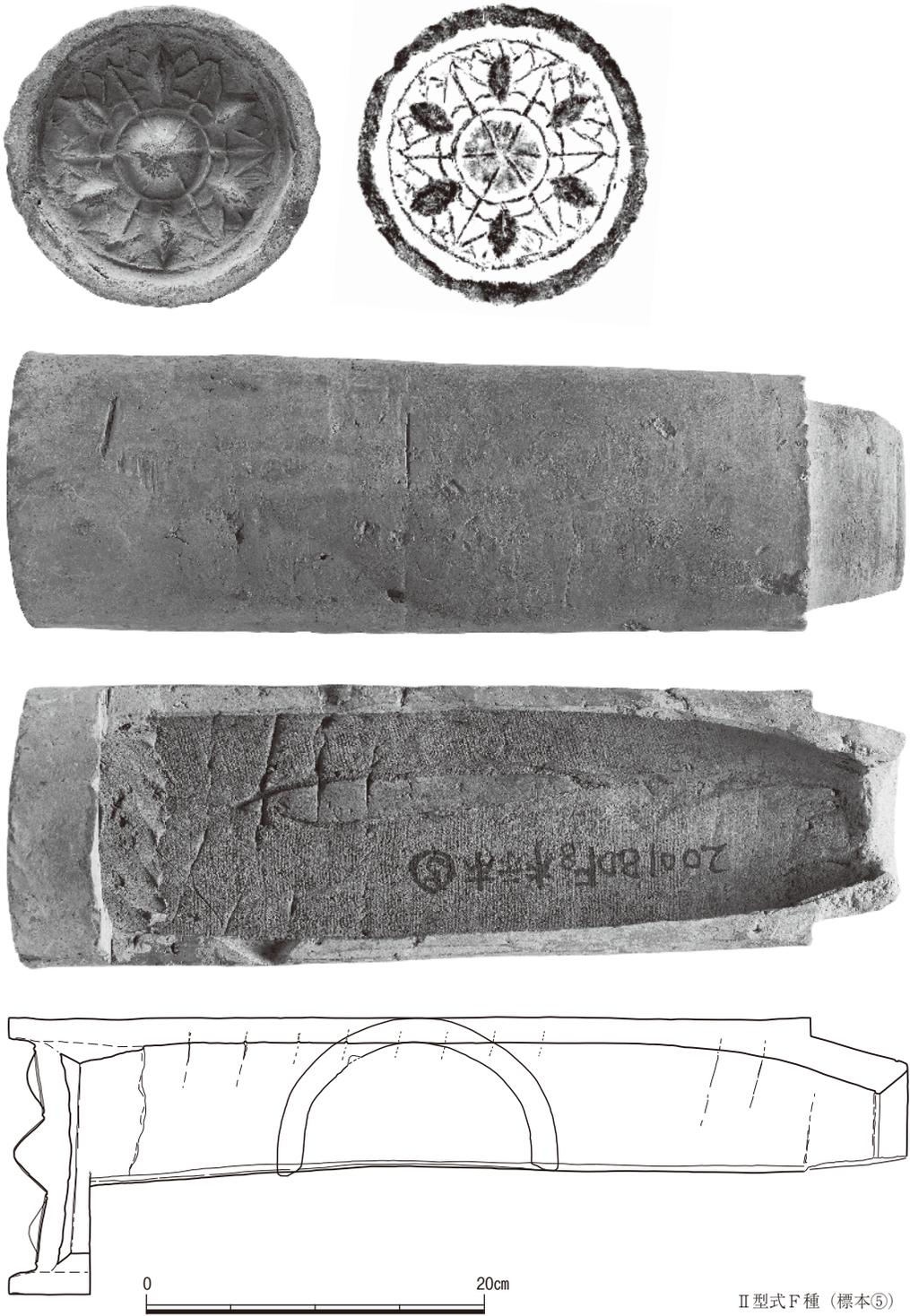


図8 II型式C種・II型式D種・II型式E種 (縮尺1/4)

行が観察できた(図5)。しかし、範傷進行の前後で製作技法等の変化は特に認められない。

B種 (12点) (図6・7、図版1-3) 『報告』のB類に該当する。蓮蕾文間の幾何学文の外側はA種に似るが、1ヵ所のみ、「M」字の中央に三角形を置き「山」字状に配列する。範傷を多数生じており、一部の範傷について、ないものからあるものへの範傷進行が観察できた。しかし、範傷進行の前後で製作技法等の変化は特に認められない。

C種 (2点) (図8上、図版2-1) 『報告』のC3類に該当する。蓮蕾文間の幾何学文の外側は、すべて「M」字の中央に三角形を置き「山」字状に配する。中房に8本の区画線を



II 型式 F 種 (標本⑤)

図 9 II 型式 F 種 (縮尺 1/4)

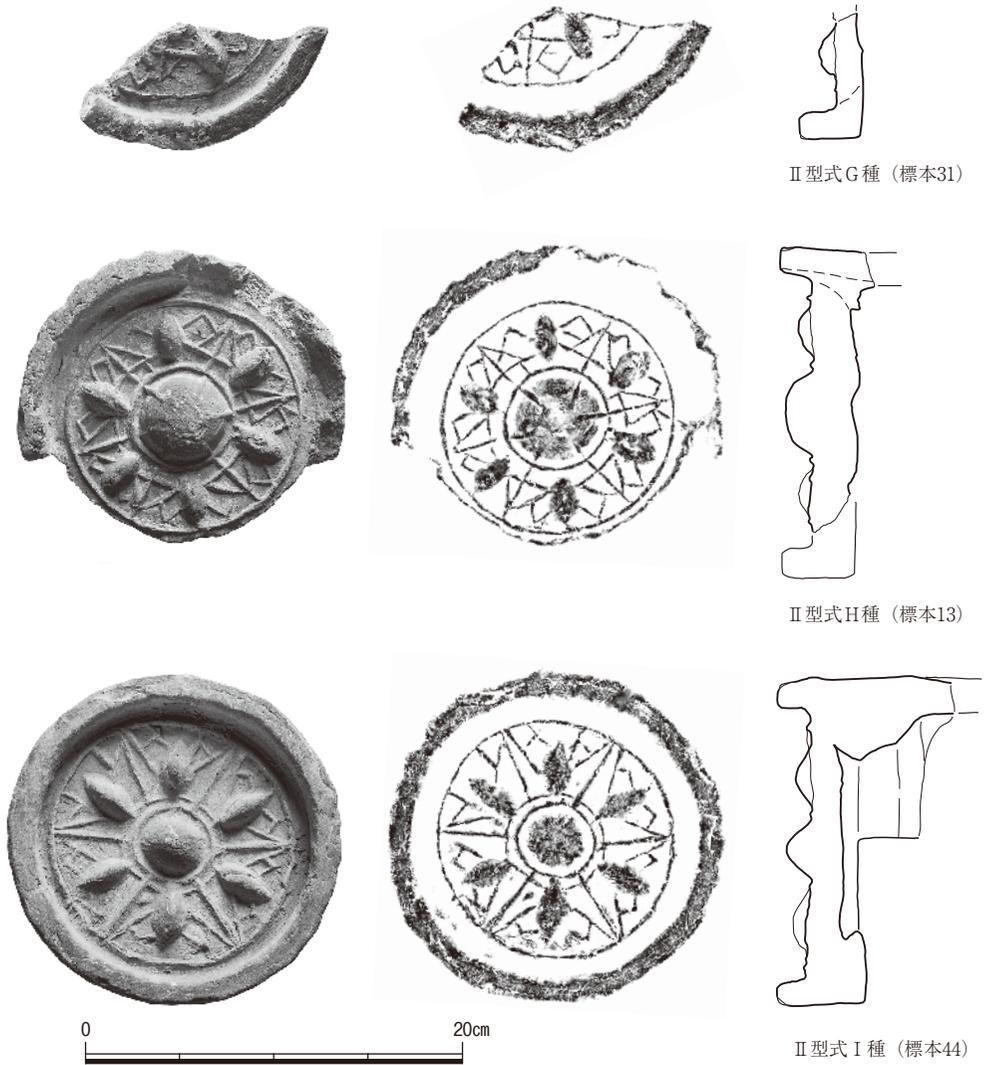


図10 II型式G種・II型式H種・II型式I種 (縮尺1/4)

配するが輻線と対応しない。蓮蕾文間をつなぐ直線が中房圏線外側で六角形をなす。

D種 (7点) (図8中、図版2-2) 『報告』のD類に該当する。蓮蕾文間の幾何学文が他種に比べ乱れており複雑である。中房はやや小ぶりである。中房に輻線と対応する6本の区画線を配する。蓮蕾文間をつなぐ直線を欠き、中房圏線外側の直線が星形をなす。

E種 (1点) (図8下、図版2-3) 蓮蕾文間の幾何学文の外側は、すべて「M」字の中央に三角形を置き「山」字状に配する。蓮蕾文間をつなぐ直線が中房圏線外側で六角形をなす。

F種 (1点) (図9、図版3-1) 『報告』のC2類に該当する。蓮蕾文間の幾何学文の外側は、すべて「M」字の中央に三角形を置く「山」字状に配する。蓮蕾文間をつなぐ直線がやや曲線気味になり、中房圏線外側で円形に近い六角形をなすが、範の傷みによって文様

が不鮮明になったためかもしれない。

G種（1点）（図10上、図版3-2） 小片のため文様構成は不明。蓮蕾文間の幾何学文の外側が1ヵ所のみ残存し、すべて「M」字の中央に三角形を置く「山」字状に配する。

H種（2点）（図10中、図版3-3） 蓮蕾文間の幾何学文の外側は、すべて「M」字の中央に三角形を置く「山」字状に配する。中房は多種より大きく断面形は頂部がややつぶれた半球形で丸みが強い。中房に輻線と対応する6本の区画線を配するが、頂部が途切れる。この途切れは中房頂部が摩滅したためか、範の傷みによるものかもしれない。蓮蕾文間をつなぐ直線が中房圏線外側で六角形をなすが、一部に乱れがある。

I種（1点）（図10下、図版4-1） 『報告』のC1類に該当する。基本的な構成としては、蓮蕾文間の幾何学文の外側は、すべて「M」字の中央に三角形を置く「山」字状に配するが、一部で文様が乱れ、「M」字にならない部分がある。中房はやや小ぶりである。蓮蕾文間をつなぐ直線がやや曲線気味となり、中房圏線のすぐ外側に配されるため、中房周囲に二重の圏線をめぐらせるようにみえる。

仮J種（1点）（図11、図版4-2） 本例は他種と実物での比較検討をおこなえていないため、他種と異範であるとは確定できない。ただし、写真から判断する限り、異範である可能性がきわめて高いため、「仮J種」としておく。

蓮蕾文間の幾何学文の外側はすべて「M」字の中央に三角形を置く「山」字状に配する。蓮蕾文間をつなぐ線が曲線気味のため、中房圏線外側の六角形はやや円形に近い。

b. 製作技法の特徴

出土した軒丸瓦は瓦当部の一部のみの破片や、丸瓦部の大半を欠くものが多いものの、乾燥、焼成以前の生瓦段階の製作痕跡は基本的に共通した特徴をもち、ほぼ同じ製作技法によって作られたと考えられる。以下、各部位で観察される特徴、製作技法を復元するうえで必要な点を説明する。なお、軒丸瓦は丸瓦と比べ丁寧な調整がほどこされているため、それ以前の製作痕跡が消されてしまっていることが多い。しかし、表面の形状や残された痕跡から、丸瓦部の製作技法は基本的に丸瓦と共通したものと考えられるため、適宜、丸瓦に認められるさまざまな痕跡を参照することにより、不明な部分を補うこととする。

① 丸瓦部の特徴

いずれも筒部狭端に玉縁部がつく有段式である。以下、筒部と玉縁部に分けて説明する。

筒部 凸面は、回転を利用した横ナデをほどこしたのち、広端（瓦当外縁上面）から約1/2程度の範囲まで縦またはやや斜め方向のナデないしケズリをほどこした痕跡が残る。これらの調整の結果、凸面に縄目を残すものは認められないが、丸瓦の凸面には、完全に消されずに縦ないし斜位の縄目を残すものがあるため（図17下・18下、図版9-2・3など）、軒丸瓦の丸瓦部も同様に、縦ないし斜め縄叩きをほどこしたのちにナデないしケズリによ

りその痕跡を完全に消した可能性が高い。

筒部凹面はほぼ全面に布圧痕を残し、凹面の形状は凹凸が少なく均整が取れていることから、布をかぶせた模骨に粘土を巻き付けて筒部を製作したことは明らかである。筒部凹面の形状は、広端（瓦当部側）から狭端（玉縁部側）に向けてわずかに内径を減じるが、狭端付近で内径のすぼまり具合が若干きつくなり、玉縁部先端にいたる。玉縁部先端付近の形状は後述するが、先端から3～5cm程度は凹面に布圧痕がなく形状にばらつきがある。玉縁部凹面には模骨の端の圧痕が認められないため、模骨先端付近の形状は不明である。以上から、使用した模骨は、丸瓦部凹面に接する部分については、狭端側には向かってわずかに、狭端付近では若干きつく直径を減じ、肩部には稜をもたない砲弾形（牛乳瓶形、先端の形状は不明）と考えられる。凸面の形状も狭端付近を除けば凹面とほぼ対応しており、筒部広端（瓦当部側）から狭端（玉縁部側）に向かってわずかに細くなり、明瞭な段をもって玉縁部にいたる。

凹面には粘土の継ぎ目を観察できないものもあるが、横方向の粘土紐継ぎ目を残すものがあること（標本①・⑤：図9、図版3-1、6-1）、粘土板作りを示す痕跡は全く認められないこと、丸瓦の場合、すべての個体で凹面に横方向の粘土紐継ぎ目が観察できること（標本53：

図12など）から、軒丸瓦もすべて粘土紐作りである可能性が高い。粘土紐継ぎ目を観察できる個体では、粘土紐の幅は3～4cm程度である。粘土紐継ぎ目は、円筒主軸にほぼ直交するもののほか、やや左上がり気味になるものも存在し（標本⑤：図9、図版3-1）、粘土円筒の成形は粘土紐積み上げによるものか、あるいは粘土紐巻き上げによるものか、いずれとも特定しがたい。なお、粘土紐接合の傾きは、軒丸瓦の丸瓦部ではほとんど観察できないが、丸瓦には凹面側が高く、凸面側に低くみえるものがあるので、粘土紐を巻き付ける工程は模骨の直径が大きい面を下（粘土円筒の広端側を下、玉縁部側を上）にして、模骨を立てた状態でおこなった可能性が高い。

丸瓦部側面にはヘラケズリをほどこし、分割截面、分割破面といった粘土円筒半截の痕跡を残さない⁽³⁾。なお、側面の凸面側や凹面側に、幅の狭い面取りをほどこすものが数



図11 II型式瓦J種（標本9）



図12 丸瓦凹面の痕跡（標本53）

点あるが、特に規則性を見出しがたい。

このほか、後述するように、丸瓦部側面のうち瓦当部付近については、凹面側にわずかに分割破面を残し、外側から切り込んだと考えられるもの（標本⑤：図13下、図版3-1）や、瓦当部側に向かって粘土円筒の外側から浅く切り込んだ痕跡を残すものが数点ある。丸瓦については、側面の凹面側に分割断面、凸面側に分割破面が残り、広端側から玉縁部側に向かって粘土円筒の内側から切り込み、乾燥後に半截したことが分かる（図12）。軒丸瓦の丸瓦部の半截も、これと同様であった可能性もある。なお、丸瓦部側面のヘラケズリは、瓦当部側から玉縁部側に向かってほどこされているものが多い。

玉縁部 凸面には、筒部凸面と同様に回転を利用した横ナデをほどこす。凸面調整の特徴が筒部と玉縁部でほぼ共通しており、一連の工程でおこなわれた可能性もある。側面についても、筒部側面と一連のヘラケズリをほどこし、粘土同筒半截の痕跡を残さない。

凹面には布圧痕を残すが、先端部は幅1.0～1.5cm程度の範囲に回転を利用した横ナデをほどこし、丸みをもたせて収める。さらにその内側（瓦当部側）には、回転を利用した指ナデツケによる幅1.0cm程度の凹線をもつものがある（標本1：図6、図版5-1）。このナデツケは玉縁部先端の横ナデと連続しており、一連の工程とみられる。なお、この資料は玉縁部先端の横ナデとナデツケ凹線の上に、瓦当部側から盛りあがった粘土がかぶり、さらにその盛りあがった粘土を幅1.5cm程度、横ケズリしている。この粘土の盛り上がりは、粘土円筒の内部で、瓦当部側から玉縁部先端に向かって何かを動かした際に当たった痕跡のようにみえる。この動きは、粘土同筒を半截する際の切り込み方向と一致しており、軒丸瓦の半截も同じ向きにおこなったとすれば、粘土円筒半截時の痕跡とも想定される⁽⁴⁾。こう考えた場合、玉縁部先端の横ナデ・ナデツケが粘土円筒半截以前、横ケズリが半截後の仕上げの調整となる。なお、玉縁部先端に同様の、幅1.0～2.5cm程度の横ケズリの痕跡を残すものは他にもあるが、粘土円筒半截の工程との前後関係は不明である（標本①・⑥・50：図版5-2、6-1）。

② 瓦当部粘土、接合部の特徴

瓦当部粘土、筈の形状 瓦当部粘土の形状は、丸瓦部の一部が剥離し瓦当部粘土の断面形状が分かるものからみて、直径13～14cm、厚さ1～2cm程度の平坦な円盤で、側面はやや丸みをもちながら瓦当裏面から瓦当面に向かって若干開く形状を呈していたと考えられる（標本10・16・25：図13上、図版7-1・2・3）が、側面が開かない円柱状を呈するようにみえるものが1点ある（標本17：図13中）。瓦当裏面には指頭によると思われる圧痕による微妙な凹凸が多数残るため、文様面を上に向けた筈の上に粘土を手で押し込んで瓦当部粘土を成形したと考えてよい。後述するように筈と瓦当部粘土が粘土円筒の内側に嵌め込まれたと考えられることから、筈は円形を呈し、直径は瓦当部粘土とほぼ同じく13～14cm、

端部の厚さは瓦当外縁の高さと同じ1～2 cmに復元される。ただし、瓦当面の形状が中房に向かって中凹み気味になるものがあるため、範の文様面が若干中高であった可能性もある（標本⑤・14：図8）。範は瓦当外縁内側までおよんでおり、外周圏線の外側に範傷が多く認められる（図版8-2・7）。

接合部の特徴 瓦当裏面下半には、土手状の高まりが突帯として残存する（図13下）。突帯上面にはヘラ切りの痕跡が明瞭に残る。また、瓦当部粘土全体が剥がれた丸瓦部が2点出土しており（標本①・2：図版6-1・2）、丸瓦部広端が瓦当外縁となっていたことがわかる。これらの状況から、半截前の粘土円筒広端の内側に円盤状の瓦当部粘土を嵌め込んで接合した後に、粘土円筒を半截して円筒不要部を切り取ったことは確実である。同範の軒丸瓦では瓦当外縁の高さに大きな差がない。瓦当部粘土を横、あるいは上から粘土円筒に嵌め込んだ場合、瓦当外縁の高さには個体差が生じると考えられるが、そのような違いはみられない。

したがって、粘土円筒へ瓦当部粘土を嵌め込む際には、範が瓦当部粘土の下に残ったままの状態、玉縁部を上にして粘土円筒を立て、上からかぶせるように嵌め込んだ可能性が高い。

円筒不要部切り取りの工程を示す痕跡 粘土円筒の不要となる半分を切り取る工程は、a) 粘土円筒の半截（円筒長軸に平行し、丸瓦部側面を形成する切り込み）、b) 円筒不要部先端の切り離し（瓦当裏面に平行し、瓦当裏面下半の突帯上面を形成する切り込み）の二つの工程からなる。a) は、すでに説明したとおり、丸瓦部側面のヘラケズリにより痕跡が完全に消されたと考えられ、半截の工程は不明である。

ただし、瓦当部付近には半截時のものと思われる浅い切り込みを残すものがあり（標本8）、一部はb) の切り込みを超え、さらに瓦当側面に切り込みがおよぶものがある（標



図13 瓦当部粘土と接合部の形状
（上：標本25、中：標本17、下：標本⑤）

本18・19：図版7-6)。これらの浅い切り込みは、玉縁部側から瓦当部側に向かってほどこされている。

b) の切り込みは、瓦当裏面下半の突帯上面に痕跡が明瞭に残る。切り込みはヘラ状工具により複数回に分けておこない、上面をほぼ平坦に仕上げる（標本23：図版7-7）。このヘラ切りの痕跡が瓦当裏面の一部におよぶものがある（標本45・L-01：図版7-8）。砂粒の動きなどから、b) の切り込みの向きは、時計回りと反時計回りのいずれも存在するが、丸瓦部側面付近では瓦当裏面下半に向かう方向に切られている。

b) の切り込みについても、a) と同様に浅い切り込みが、丸瓦部側面のa) の切り込みを超えて丸瓦部凸面におよぶものがある。a) とb) の浅い切り込み同士に切り合いが生じているものが5点あり、a) → b) の順になっているものが4点（標本8・13・38・44：図版7-5）、逆にb) → a) の順が1点ある（標本18：図版7-6）。a) → b) が基本的な切り込みの順序であり、b) → a) が例外であった可能性もあるが、a) の浅い切り込みは半截部を示す下書きや目印であった可能性も残る。

なお、切り離された円筒不要部は丸瓦として使用されたと考えられるが、法量や調整痕跡からみて、今回調査した丸瓦の中に切り離された円筒不要部と特定できるものはない。

接合部補充粘土 瓦当裏面と丸瓦部凹面の接合部分には、紐状の粘土が貼り付く。これは、瓦当部と丸瓦部の接合を調整・補強する目的で補充されたものと考えられるので、以下、接合部補充粘土と呼ぶ。瓦当部粘土に押されて玉縁部側に向かって盛り上がった状況を呈するものがあること、円筒不要部先端切り離し、先述のb) の工程の際に、瓦当裏面下半の突帯とともに接合部補充粘土も切っていることから、接合部補充粘土は、粘土円筒に瓦当部粘土を嵌め込む前に、粘土円筒の内側に貼り付けられたものである。

接合部補充粘土の断面形は、おおむね三角形を呈するものが多い（図版6-1・2）。これは、瓦当部粘土の側面形状に対応した形状と考えられ、瓦当部粘土との接合部を密着させる工夫であろう。接合部補充粘土の玉縁部側の端は粘土円筒の広端から6～8cm程度までおおよび、端を斜めになでついたり（標本⑤・21：図9、図版3-1）、横ナデをほどこしたり（標本2・11・13：図版6-2）して密着させる。この付近の丸瓦部凹面には、右上がりの斜め刻み目（標本⑤・3・50：図9・13下、図版8-8）や、「X」字状に交差した刻み目がみえるもの（標本21）があり、接合部補充粘土を貼り付ける前に、粘土円筒内側にヘラ刻みを入れたことがわかる。接合部補充粘土を粘土円筒内側に密着させ、剥がれにくくするための工夫であろう。

一方で、瓦当裏面と接合部補充粘土の接合部については、両者が密着したものが少数存在するものの、ほとんどの個体で接合部に若干の隙間があり、中には大きな隙間が生じているものもある（標本7・20・21・39など：図13中、図版6-3）。円筒不要部切り取り後で

あれば、接合部にナデツケをほどこすなどしてこの隙間を埋め、瓦当裏面と接合部補充粘土をさらに強く密着させ、剥がれにくくする加工をほどこすことも可能であったと考えられる。また、こうした加工をすれば、瓦当部粘土の固定に大きな効果を発揮したと予測される。しかし、金嶺寺遺跡出土の軒丸瓦を製作した工人たちは、そうした工夫をおこなわなかったようである。この隙間を埋めるナデツケなどをほどこそうとすれば、瓦当部粘土を裏面から圧迫することとなり、瓦当部粘土の下に筈が残った状態でなければ、瓦当部粘土が外れるおそれがある。逆にいえば、接合部補充粘土と瓦当裏面の隙間を埋める工夫をしなかった理由として、円筒不要部切り取りの際には、筈はすでに取り外されていた可能性が考えられよう。

接合部補充粘土を貼り付けた目的は、嵌め込まれた瓦当部粘土を裏（玉縁部側）から押さえて固定するとともに、粘土円筒の内径を狭め、瓦当部粘土と粘土円筒の間に隙間を作らないためと考えるのが妥当であろう。瓦当部粘土嵌め込みの工程において、瓦当部粘土の直径と粘土円筒の内径が適合するか否かはきわめて重要であり、最も気を遣う点であったと考えられる。瓦当部粘土の直径は筈により、粘土円筒の内径は模骨により規定されることから、両者にそれほど大きな齟齬は生じなかったと推測されるが、接合部補充粘土を内側に貼り付け、粘土円筒の内径を微妙に調整することにより、瓦当部粘土嵌め込みの工程をいっそう確実にしたのであろう。

瓦当外縁上面および内側 瓦当外縁内側には、瓦当部粘土を嵌め込んだ際の痕跡、つまり縦方向の擦痕や押し潰されたような痕跡などが残されると想定されるが、実際にはそうした痕跡がすべてに認められる訳ではない（標本1・⑤：図版4-4）。瓦当外縁内側には横方向のナデ、ナデツケの痕跡が残るものがあり（標本29：図14上、図版8-1）、これによって瓦当部粘土嵌め込みの痕跡が消されたと考えられる。この横ナデないし横ナデツケが、外周圏線外側の筈傷にかぶるようにみえるものもある（標本44：図版8-2）。この横ナデないし横ナデツケは、瓦当部粘土嵌め込みによって乱れた瓦当外縁内側を整えるとともに、瓦当部粘土を固定する効果も果たしたかもしれない。



図14 瓦当外縁上面と内側の状況
（上：標本29、下：標本25）

また、瓦当外縁の上面および内側には粘土継ぎ目が認められるものが多い（標本11・13・15・25など：図14下、図版8-3・4・5）。この継ぎ目の外側は丸瓦部の広端であるが、その内側は、a) 粘土円筒の内側に貼り付けた接合部補充粘土が広端までおよんでいるか、b) 瓦当部粘土を粘土円筒に嵌め込んだ際に、圧迫された瓦当部粘土または接合部補充粘土の一部がはみ出したものであろう。このほか、c) 瓦当部粘土嵌め込みの際などに形状が崩れた瓦当外縁を整形するために、粘土を貼り足したものもあるかもしれない。

瓦の状況からはいずれとも判断しがたいが、いずれの場合もあった可能性がある。常に起こりえるc) はさておき、a)、b) については、瓦当部粘土嵌め込みの具合による可能性が考えられる。b) の場合、瓦当部粘土の直径に比べ、やや内径が小さめの粘土円筒に瓦当部粘土を無理に押し込んだため、瓦当部粘土や接合部補充粘土の端が瓦当部側にはみ出す結果になったと考えられる。一方、a) の場合には、瓦当部粘土の直径に比べ、粘土円筒の内径がやや大きかったため、瓦当部粘土嵌め込みの際に、粘土円筒の内側に接合部補充粘土を多めに貼り付けて調整したと考えることも可能である。瓦当部粘土と丸瓦部凹面との間に接合部補充粘土が入り込み、瓦当面におよんでいると考えられるものがあるので（標本①・10など：図版6-1、7-3）、さらに瓦当外縁内側までおよぶ場合もあったのかもしれない⁽⁵⁾。

なお、いずれの個体においても、丸瓦部側面の厚さと比べ瓦当外縁は薄い。丸瓦については、広端から数cmの範囲にナデないシケズリをほどこすことにより、布圧痕が消されるときともに器壁が薄くなっているものが多い（標本49・52など：図12、図版9-1・3）。軒丸瓦にも同様な調整がおこなわれた結果、粘土円筒広端付近が薄くなった可能性が考えられよう。丸瓦部凹面の接合部付近には、布圧痕を消した痕跡は認められないことから、この加工がおこなわれた範囲は、接合部補充粘土で完全に覆われていると考えられる。

③ 丸瓦部の押圧痕

中国では、前漢代以来、平瓦広端の凸面側に押圧波状文をほどこす事例が知られている（向井2005、大脇2005、今井2010）。後述するように、金嶺寺遺跡出土平瓦にも同様の押圧波状文が認められる。

ところが、金嶺寺遺跡出土瓦には、この押圧波状文とよく似た指頭によるとみられる押圧痕が、軒丸瓦の瓦当外縁上面の凸面側、2点の軒丸瓦の丸瓦部側面の凸面側にも認められ（標本5・39：図15上）、さらに不明瞭であるが、玉縁部先端の凸面側にも存在する可能性がある（標本①：図15下）。瓦当外縁上面の押圧痕は、およそ1～2cmおきに隙間なくほどこされ、瓦当外縁に対して右上がりの傾斜をもっているものが多い。中には、凸面側の押圧痕にほぼ対向する位置にあたる凹面側（瓦当外縁内側）にも、同様の押圧痕が残るものがある（標本15・25：図版8-5）ため、おそらく、範取り外し後に外縁を親指と人差し

指で挟んでねじるようにほどこしたの
であろう。

瓦当外縁上面の凸面側の押圧痕は、
瓦当外縁上面に残る、押しつぶされた
ような痕跡によってつぶれ、瓦当外縁
上面は平坦になっている。したがって、
この指頭押圧は瓦当部嵌め込み、範取
り外し後にほどこされ、その後、瓦当
外縁上面を下、玉縁部を上にして丸瓦
部を立てて置く工程があったと考えら
れる。

つぎに、丸瓦部側面の凸面側に残る
押圧痕については、3～4cmおきにほ
どこされ、凹面側にはこれに対応する
押圧痕が不明瞭である。押圧痕の部分

は丸瓦部側面に凹凸が認められることから、丸瓦部側面のヘラケズリ後に押圧をほどこした
と考えられる。玉縁部先端については、一部欠損もありはっきりしない。

これらの押圧痕には、装飾以外の機能を見出しがたく、文様の一種と考えるのが妥当で
ある。しかし、丸瓦部側面や玉縁部先端については、普通に屋根に葺いた状態でこの押圧
痕がみえたとは考え難い。きわめて特殊な場所に使われた可能性もあるが理解に苦しむ。
いずれにせよ、瓦の端部に押圧をほどこすことに対する工人のこだわりが感じられる。

④ 粘土円筒の向き

ここまで説明したさまざまな痕跡と、そこから復元される工程は、粘土円筒をどのよう
な向きにしておこなったのか、検討しておく。

瓦当外縁上面には、押しつぶされたような痕跡が全面に明瞭に残る。これは、瓦当外縁
(粘土円筒広端)を下に、玉縁部を上にして丸瓦部(粘土円筒)を立てた段階が確実に存在
し、瓦当外縁上面を最終的に調整することがなかったことを示している。また、粘土円筒
および玉縁部凸面、玉縁部先端付近には回転ナデがほどこされており、回転台上に粘土円
筒広端を下にして粘土円筒を立てた状態で、一連の工程としておこなった可能性が高い。
このほか、粘土円筒が同様の向きとなる工程は、瓦当部粘土の嵌め込み、粘土円筒成形の
ための粘土紐積み上げないし巻き上げなども考えられ、粘土円筒を半截するための縦方向
の切り込みも同様であった可能性がある。

ところが一方で、粘土円筒広端付近の内側を調整し、刻み目を入れ、接合部補充粘土を



図15 丸瓦部の押圧痕
(上：丸瓦部側面：標本39、下：玉縁部先端：標本①)

貼り付けるという工程は、模骨を取り外した後、細い玉縁部側から手を入れておこなったとは考えがたく、粘土円筒広端側からおこなった可能性が高い。つまり、この工程は、粘土円筒を横に寝かせるか、玉縁部を下にして粘土円筒を立てた状態でおこなったと推測される。このほか、范の取り外し、瓦当外縁内側のナデツケ、瓦当外縁上面の押圧の工程も同様である。また、円筒不要部先端の切り離しについては、粘土円筒広端を下にして立てた状態で切り込むことも可能であるが、粘土円筒の自重により工具が圧迫され、困難が予想される。

しかし、丸瓦部凸面、玉縁部先端のいずれも丁寧に調整されており、これらの工程をおこなった際の粘土円筒、あるいは円筒不要部切り取り後の軒丸瓦の向きを示す根拠は見当たらない。ただし、玉縁部を下にして立てた状態があったとすれば、玉縁部先端に自重がかかり、玉縁部先端に何らかの変形が生じることが予想され、玉縁部の凹凸両面に丁寧な調整をおこなう必要がある。日本の民俗例では、丸瓦用の凹型台が存在し、丸瓦を横向きに寝かせて粘土円筒の切り離しをおこなった事例が報告されている（京都泉涌寺例、奈良瓦宇例。大脇1991：36頁、図版I-8・9）。こうした凹型台等の道具を利用し、横向きに寝かせてこれらの工程をおこなったと考えるのも一案であろう。

c. 製作技法の復元

ここまで説明した観察結果から推測される、金嶺寺遺跡出土軒丸瓦の標準的な製作技法は以下のとおりである（図16）。

① 粘土円筒の製作

砲弾形（牛乳瓶形、先端の形状は不明）の模骨に布をかぶせ、直径が大きい方の面を下にして回転台上に模骨を立て、周囲に幅3～4cm程度の帯状の粘土紐を巻き上げないし積み上げて、粘土円筒を成形する（図16-1）。粘土円筒外側の狭端から5～6cm程度の部分に粘土を貼り足して肩部を作り、筒部と玉縁部に段差をもつ有段式とする。その後、粘土円筒の外側に縦ないし斜め縄叩きをほどこしたものと推測されるが、その痕跡が完全に消されているため、肩部貼り足しとの前後関係や縄叩きをほどこした範囲は不明である。さらに粘土円筒および玉縁部の凸面全体、玉縁部先端に回転を利用した横ナデをほどこしたのち、広端から1/2程度まで縦方向のナデないしケズリをほどこすが、これらの調整がどの段階でほどこされたのかは不明である。これらの調整はきわめて丁寧にほどこされ、凸面のほとんどの痕跡を消すことから、回転ナデは円筒不要部切り取りの直前、縦方向のナデないしケズリはさらに後におこなった可能性も考えられる。

続いて、模骨から粘土円筒を外す（図16-2）。日本や韓国の民俗例のように、内側に布が貼り付いた状態の粘土円筒を模骨から外し、つぎに粘土円筒内側から布をはがすのであろう（大脇1991：34-36頁）。

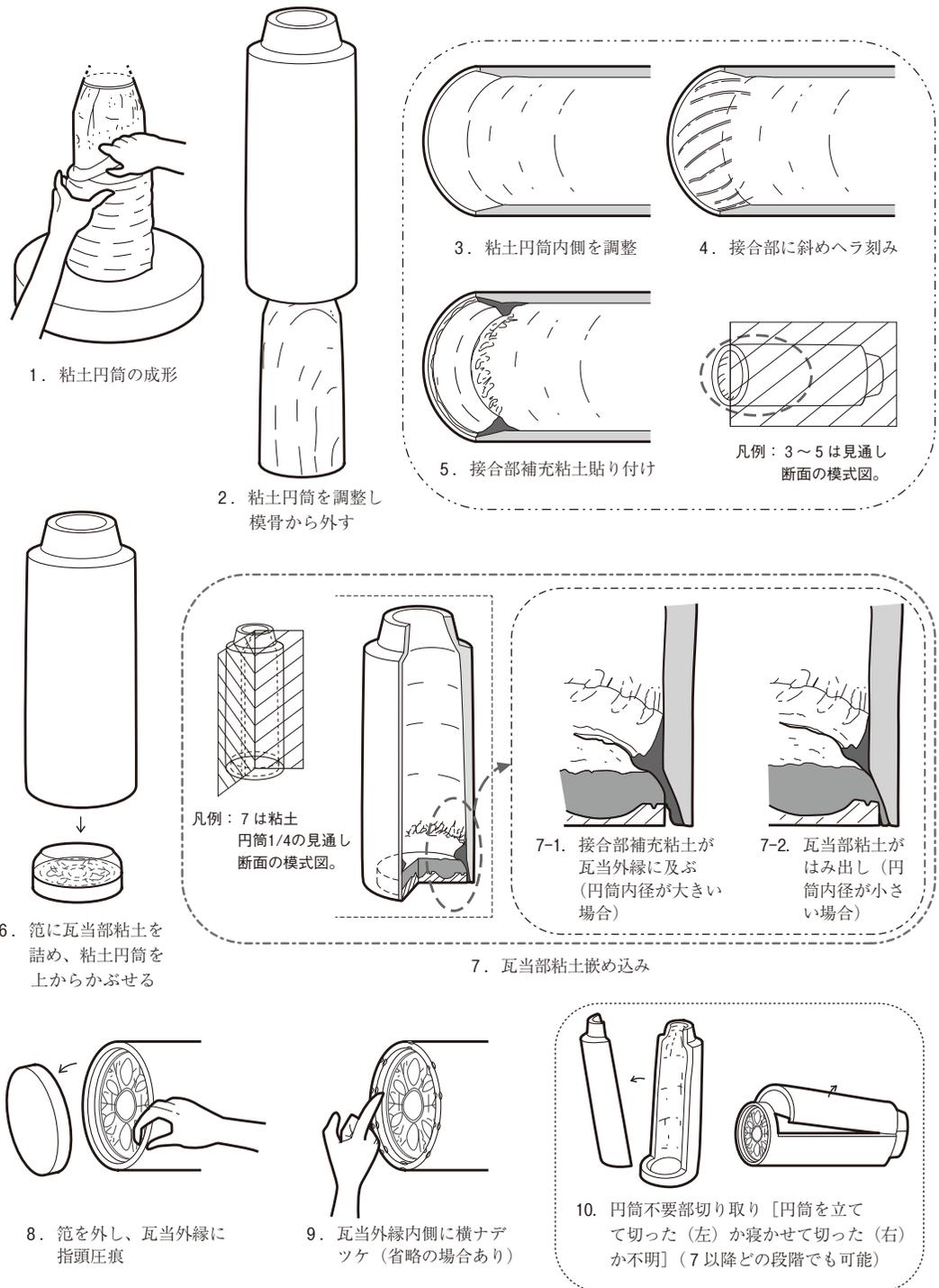


図16 金嶺寺遺跡出土軒丸瓦の製作技術復元模式図

② 粘土円筒広端付近の内側の加工

粘土円筒広端付近の内側を調整し（図16-3）、粘土円筒広端からおおよそ8cm程度の範囲に斜めないし「X」字状に交差するヘラ刻み目を入れる（図16-4）。つぎに、ヘラ刻み目を入れた部分に接合部補充粘土を貼り付け、横ナデないし横ナデツケをほどこして断面三角形に整える（図16-5）。これらの工程は、粘土円筒を横に寝かせるか、玉縁部側を下にして立てておこなったと考えられる。

③ 瓦当部粘土の製作

直径13~14cm、厚さ1~2cmの円盤形を呈する木製の範を、文様面を上向きにして置き、範の上に粘土を押し付け、瓦当部粘土を製作する。瓦当裏面には指頭によると思われるナデないし押圧をほどこして厚さ1~2cm程度の円盤状とし、側面は瓦当面側に向かって若干開くやや丸みのある斜面をなす截頭円錐形風に仕上げる（図16-6）。この③の工程と①・②の工程はまったく別に進めることが可能であり、前後関係は不明である。

④ 瓦当部粘土嵌め込み

範を下に敷き、瓦当裏面が上を向いた状態、つまり③の瓦当部粘土製作時のままの状態の瓦当部粘土に、粘土円筒の広端側を上からかぶせるようにして、瓦当部粘土を粘土円筒広端の内側に嵌め込む（図16-7）。瓦当部粘土の側面が接合部補充粘土と密着し、瓦当裏面側では、接合部補充粘土の一部が玉縁部側に押し込まれる。瓦当面側では、接合部補充粘土または瓦当部粘土の一部が瓦当外縁内側にはみ出す場合があったと考えられる。

⑤ 範取り外し

瓦当外縁内側から範を取り外す。範を取り外すための工夫の痕跡は瓦にまったく残っていないため、どのようにして範を取り外したのか不明である。範の裏側に何らかの加工があったのか、あるいは台上に範を固定する加工があったのかかもしれない。

⑥-1 瓦当外縁の押圧施文

瓦当外縁の押圧施文（⑥-1）と瓦当外縁内側の調整（⑥-2）の先後関係は不明であるが、押圧施文を先に説明する。

瓦当外縁の先端に押圧をほどこす（図16-8）。瓦当外縁の先端を指で挟み込み、ひねるようにしてほどこした可能性が高い。この工程は範取り外し後であればいつでも可能であり、粘土円筒を横に寝かせるか、玉縁部側を下にして粘土円筒を立てておこなわれたと考えられる。

⑥-2 瓦当外縁内側の調整

瓦当外縁の内側に横ナデツケをほどこして表面の凹凸を調整し、瓦当外縁が直立縁を呈するように形状や厚さを整える（図16-9）が、この調整を省略する場合もある。この工程は、粘土円筒を横に寝かせるか、玉縁部側を下にして粘土円筒を立てておこなわれたと

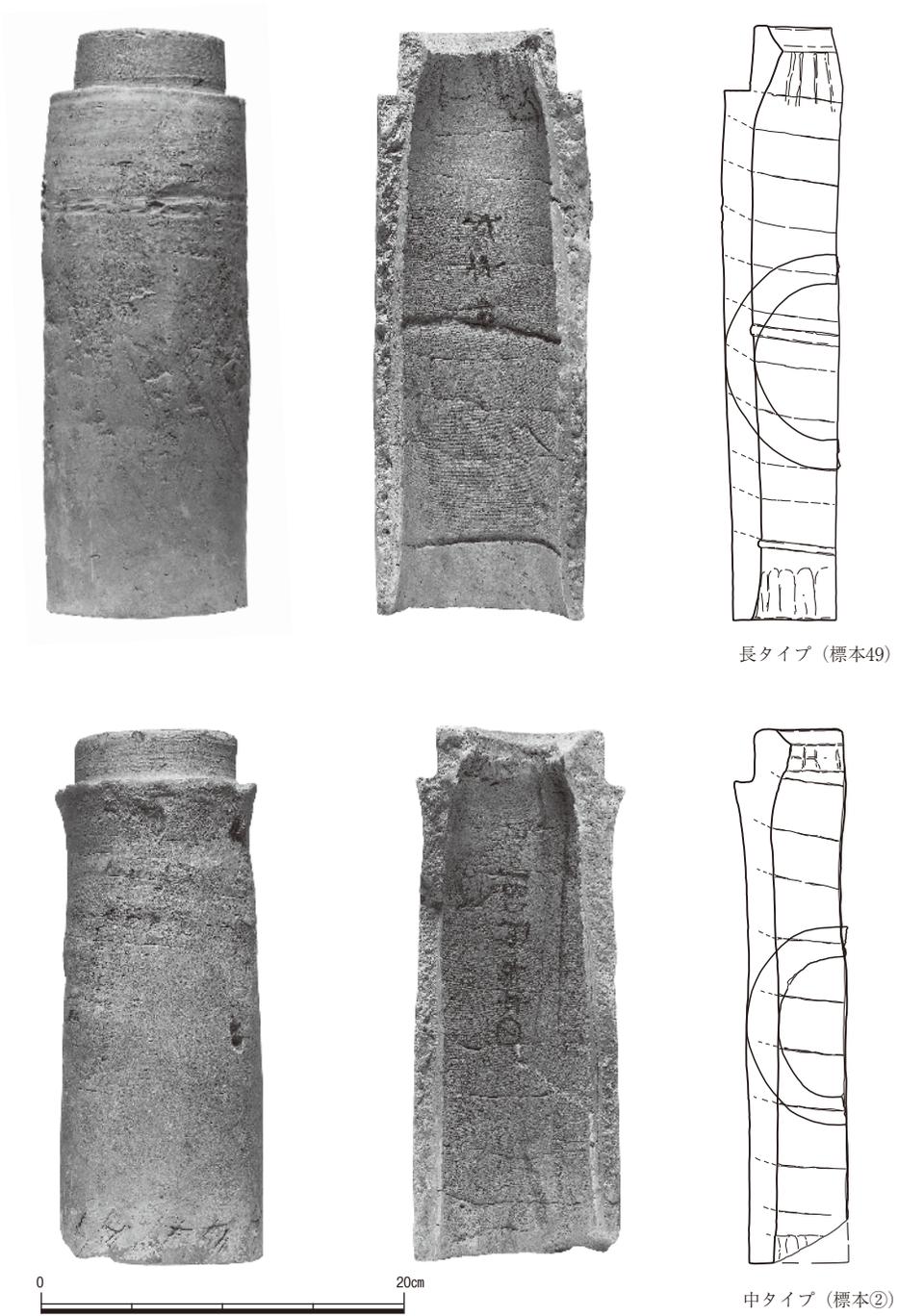


図17 丸瓦長タイプと中タイプ (上: 標本49、下: 標本②) (縮尺1/4)

考えられる。

⑦ 円筒不要部切り取り

粘土円筒のうち不要となる半円筒を切り取る工程は、a) 粘土円筒を縦方向に半截し、

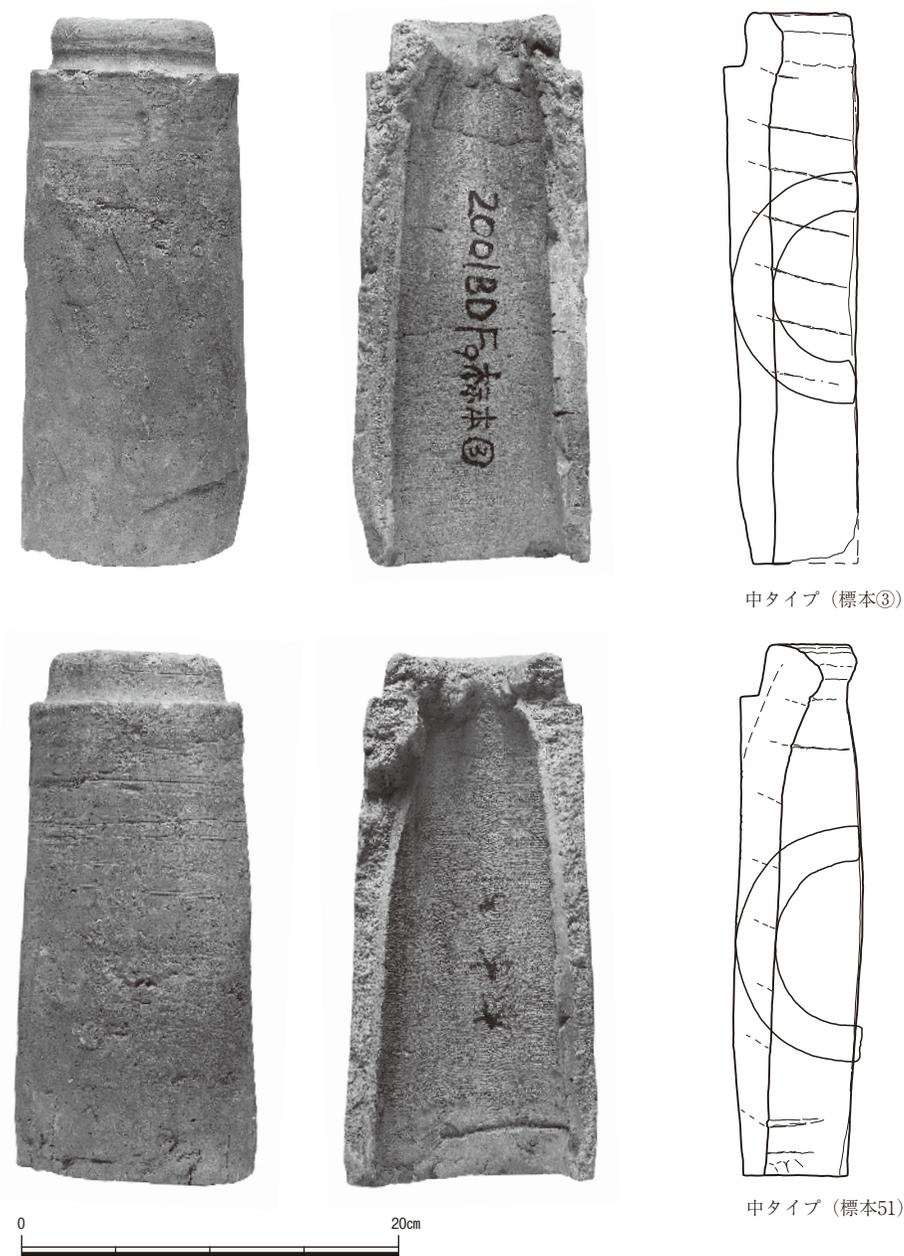


図18 丸瓦中タイプ (上: 標本③、下: 標本51) (縮尺1/4)

b) 不要な半円筒の先端を瓦当裏面の高さで切り離す、という2つの工程からなり、多くの場合、a) → b) の順であったと考えられる (図16-10)。

a) の粘土円筒半截については、丸瓦部側面のヘラケズリによって痕跡が消されているため、どちらに向かってどこから切り込んだかの詳細は不明である。しかし、瓦当部付近では、ヘラ状工具により瓦当裏面側に向かって粘土円筒の外側から切る場合があった可能

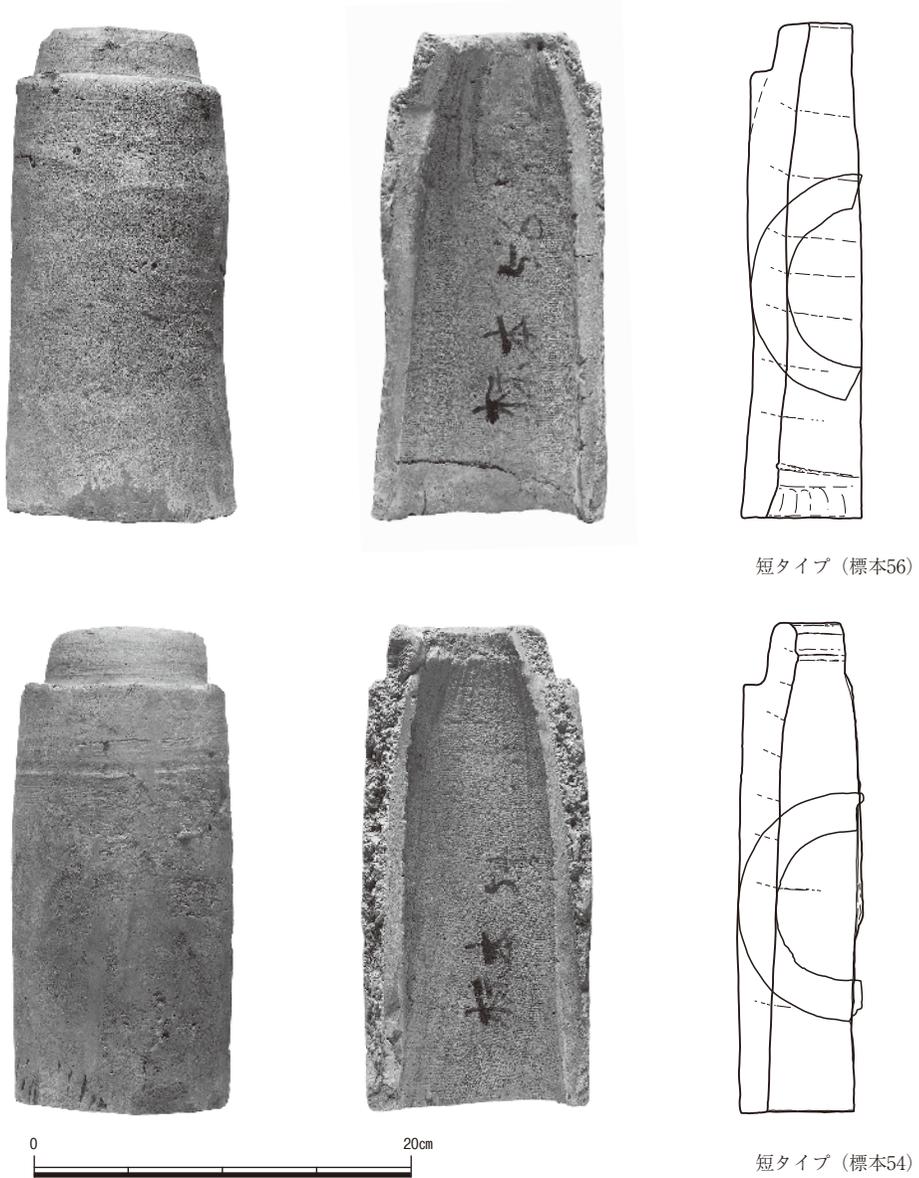


図19 丸瓦短タイプ (上: 標本56、下: 標本54) (縮尺1/4)

性がある。その後、丸瓦部側面のヘラケズリをおこない、切り込みの痕跡を消す。このヘラケズリは粘土円筒を立てた状態でも、横に寝かせた状態でも可能である。

b) の切り離しは、瓦当外縁上面から3～5cm程度、瓦当裏面の高さ付近で、凸面側(外側)から数回に分けてヘラ状工具による切り込みを入れることによりおこなわれ、取り除かれた円筒不要部の先端の切り残しが瓦当裏面下半に突帯として残る。切り込みの向

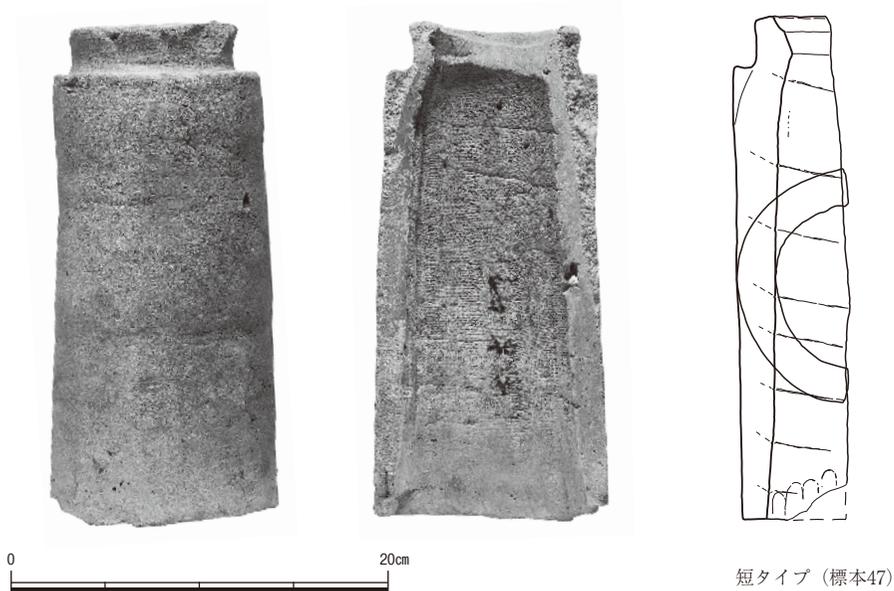


図20 丸瓦短タイプ (縮尺1/4)

きは、丸瓦部側面付近では丸瓦部側面側から瓦当裏面下半側に向かっているが、それ以外の部分では、時計回りと反時計回りの双方が認められる。この工程は、粘土円筒を横に寝かせた状態であった可能性も考えられる。

なお、この円筒不要部切り取りの工程は、笠取り外し (⑤)、瓦当外縁の押圧施文と内側の調整 (⑥) より先におこなわれた可能性がある。また、丸瓦部側面に押圧施文する工程は、円筒不要部切り取り、丸瓦部側面のヘラケズリ後であればどの段階でも可能である。

最後に、再び瓦当外縁を下にして立てる工程があると考えられる。この状態で乾燥させた可能性もある。その後、生瓦を乾燥、焼成して完成にいたる。

(2) 丸瓦

調査した丸瓦は9点である。軒丸瓦に比べ点数が限られ、十分な分析は困難である。おおむね、軒丸瓦の丸瓦部と共通した特徴をもつが、法量、製作技法の一部などが異なる。

法量は文末の表2にまとめて記す。軒丸瓦は法量がほぼ一定しているが、丸瓦は全長により、長、中、短の3タイプに分けることが可能である。基本的な製作技法はどのタイプも共通するが、タイプごとに若干の特徴がある。

まず、3タイプに共通する特徴をあげる。筒部の成形は軒丸瓦と共通し、布をかぶせた砲弾形 (牛乳瓶形、先端の形状は不明) の模骨の周囲に幅3~5cmの粘土紐を積み上げないし巻き上げて成形する。狭端から3.5~6cm程度の部分に粘土を貼り足して肩部を作り、筒部と玉縁部に段差をもつ有段式とする。凸面の調整もほぼ軒丸瓦と共通し、玉縁部を含

め回転を利用した横ナデをほどこした後、縦ないし斜め方向のナデをほどこし、凹面は布圧痕が残るが、凹面全面に布圧痕を残すもの、広端付近のみナデにより布圧痕を消すもののほか、広端付近のわずかな段から広端側には布圧痕がないものもあり、このわずかな段が布端の可能性もある（標本49・51・56：図17上・18下・19上）。

広端と玉縁部先端についても軒丸瓦と同じく、広端には未調整で押しつぶされたような痕跡が残り、玉縁部の先端はナデにより丸く収め、内側に削りをほどこす。ただし、広端にナデをほどこしたものが1点ある（標本56：図版9-5）。ナデをほどこしたのち、さらに押しつぶされた痕跡はみえないため、乾燥直前の最終段階で広端にナデをほどこした可能性がある。側面の調整痕跡は軒丸瓦と異なり、凹面側からヘラ状工具で切り込んだ分割断面が、筒部広端から玉縁部先端付近まで連続して残り、凸面側に分割破面を残す。分割断面には広端側から玉縁部側に向けて工具を動かした痕跡が残る。

つぎに、各タイプの特徴を説明する。

長タイプ（2点） 全長が49cmを超えるものである（49.0～51.3cm）（標本49・52：図17上、図版9-1）。筒部長は43.8～45.5cm、筒部の厚さは1.6～3.0cm、筒部外径は17.0～17.2cmである。軒丸瓦の丸瓦部に近い法量で、形状が整い作りも丁寧で軒丸瓦の丸瓦部に近い。凸面は丸瓦部と同じく筒部から玉縁部にかけて回転を利用した横ナデをほどこした後、広端から2/3程度の範囲に斜めケズリないしナデをほどこすものと、広端から10cm程度の範囲に丁寧なタテナデをほどこすものがある。粘土紐の幅は3～4cm程度で、玉縁部を上にした場合、凹面側が高く凸面側に低い、いわゆる外傾接合にみえるものがある（標本52：図版9-1）。凹面は布圧痕を残すが、広端から幅6～7cm程度の範囲にナデをほどこして布圧痕を消す。側面に残る分割断面は幅が狭く、広いところでも1.0cm以下である。

中タイプ（4点） 全長が43cm前後のものである（42.0～43.6cm）（標本②・③・51・53：図12・17下・18、図版9-2）。筒部長は38.5～39.5cm、筒部の厚さは2.0～3.9cm、筒部外径は17.0～19.7cmである。厚手のものがやや多い。

凸面の調整は全長が長いタイプと類似点が多いが、広端付近にわずかに縄目がみえるものが1点ある（標本②）。凹面は布圧痕を残すが、広端から幅3cm程度の狭い範囲にナデをほどこして布圧痕を消す（標本②・53：図12・17下）。

短タイプ（3点） 全長が40cm以下のものである（39.2～40.0cm）（標本47・54・56：図19・20）。筒部長は34.5～36.0cm、筒部の厚さは1.9～3.3cm、筒部外径は18.0～18.6cmである。凸面は他のタイプと基本的に共通するが、ナデ調整がやや粗く、広端縁から3.5～5.0cm程度の範囲に斜め方向の縄叩き痕が薄く残る。2点はよく似た特徴をもち、分割断面の幅が広めで、広端から1/2程度の範囲は凸面側までほとんど側面全体を切り込み分割破面が残らない部分がある（標本47・56：図19上・20）。未調査の丸瓦1点もこれらと共通する特徴

をもつため、短タイプと考えられる（標本48：図版9-3）。残りの1点は分割断面の幅が1.5cm程度で分割破面を残す（標本54：図19下）。

標準的な製作技法は以下のように復元される。基本的に軒丸瓦の丸瓦とほぼ共通するので、詳細は省略する。

① 粘土円筒の成形

布をかぶせた砲弾形（牛乳瓶形、先端の形状は不明）の模骨に、3～5cm程度の幅の粘土紐を積み上げないし巻き上げ、粘土円筒を成形する。直径が大きい面を下にして模骨を立てた状態で製作したものと考えられる。次に肩部を貼り足し、玉縁部を作る。凸面の調整、玉縁部先端の調整は、軒丸瓦の丸瓦部と同じく、肩部貼り足し後、粘土円筒半截前のどの段階でおこなったか不明である。そして模骨から内側に布がついたままの粘土円筒を外し、布を粘土円筒の内側からはがしたものと考えられる。

② 粘土円筒半截

粘土円筒内側にヘラ状工具を入れ、広端側から玉縁部側に向かって工具を動かして切り込む。この後、分割截線を入れた粘土円筒を一定程度乾燥させる。広端につぶれたような痕跡が残ることから、乾燥時には、広端側を下にして立てた可能性が考えられる。一定程度乾燥した後、粘土円筒を分割し、丸瓦側面の凹面側に分割断面、凸面側に分割破面が残る。その後、生瓦を乾燥、焼成して完成にいたる。

（3）平瓦

調査した平瓦は2点である（標本55・57：図21、図版10-1・2）。法量は表3の通り。いずれも凹面には横方向に幅3～5cmの粘土紐継ぎ目、縦方向に幅3.0～3.5cm程度の杵板を横に連ねた圧痕が残り、杵板連結桶を使用した粘土紐桶巻きづくりである。凸面には横ナデ、広端から10cm程度の範囲に縦ナデの痕跡が残るが、わずかに縦方向の縄目がみえる部分がある。凹面はほぼ全面にわたり布圧痕が残るが、広端から幅5.0cm程度の範囲に横方向のヘラケズリの痕跡が残る。広端付近は、凹凸両面からの調整によって若干薄くなっている。

側面の凹面側には、工具による幅0.5～1.0cm程度の分割断面があり、工具を広端側から狭端側に向かって動かした痕跡が残る。側面の凸面側には分割破面が残る。ただし片側の側面のみ、側面全体が破面となっているものがある（標本57）。側面全体が破損した可能性もあるが、粘土円筒分割時に切り込みを入れた部分で割れなかった、あるいは屋根に葺く際などに平瓦の幅を調節するために人為的に割った、などの可能性も残る。横断面の形状から、粘土円筒を4分割した可能性が高い。狭端は横方向のナデないしケズリ、広端は横ケズリをほどこす。

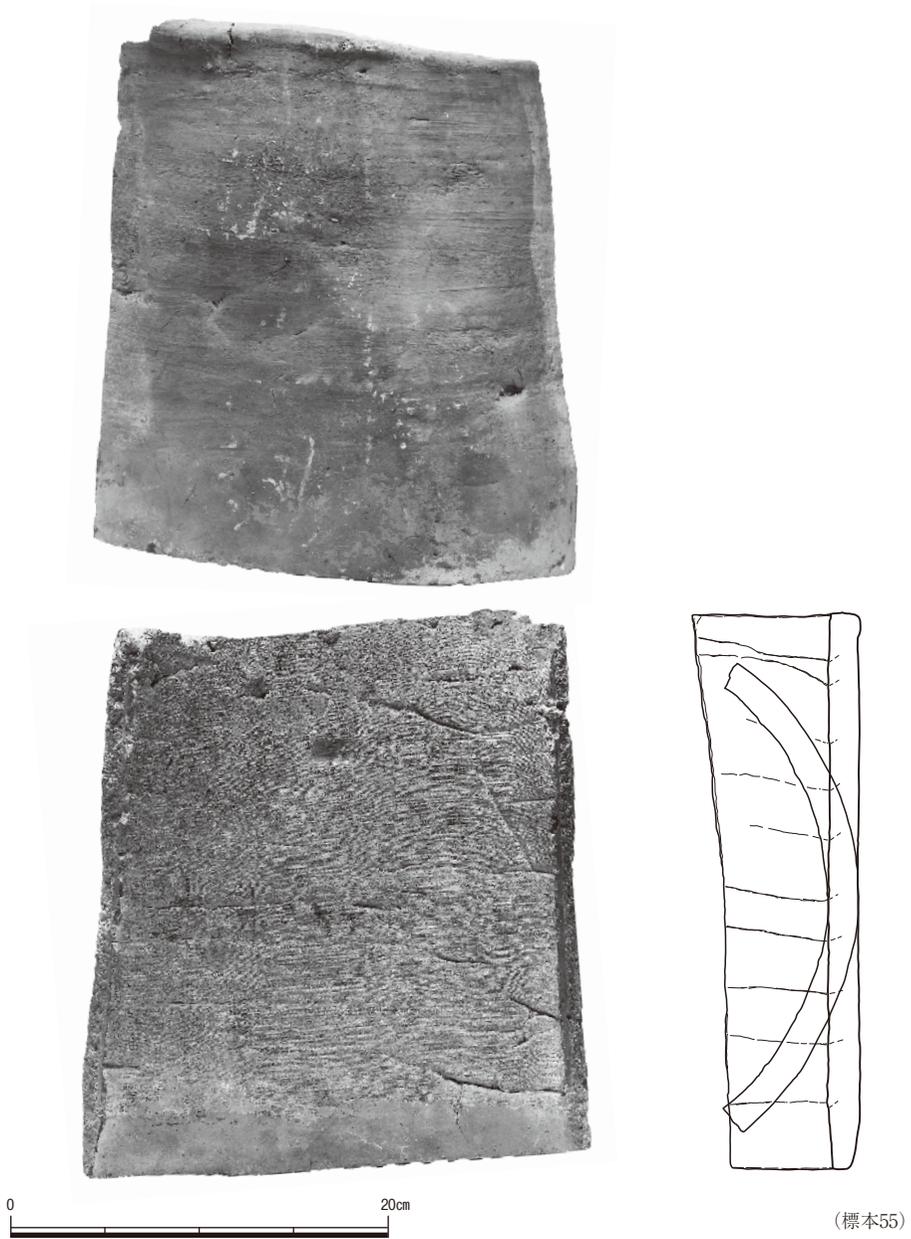


図21 平瓦 (縮尺1/4)

広端の凸面側には、幅1.0~1.5cm程度の指頭によると思われる多数の押圧痕、押圧波状文が認められる。うち1点は押圧痕がほぼ隙間なく残り(標本55:図版10-3)、もう1点は1.5~2.0cm程度の間隔を空け、押圧痕が薄く残る(標本57)。押圧痕は広端凸面側のほぼ全体におよぶが、分割によって分断されたものはない。したがって、施文は粘土円筒を分割した後におこなわれた可能性が高い。施文の際、平瓦の狭端を下に向け固定したか、

あるいは成形台上に横向きに置いたかのいずれかの状態であったと考えられるが、痕跡が残らないため不明である。

復元される標準的な平瓦の製作技法は以下のようなものである。

① 粘土円筒の成形

細い枳板を列ねた桶状の枳板連結模骨に布をかぶせ、粘土紐を積み上げないし巻き上げて粘土円筒を作る。凸面には縦縄叩きをほどこしたのち横ナデ、さらに広端付近にタテナデをほどこして表面を調整し、縄叩きの痕跡を消す。粘土円筒の内部に布が付着した状態で模骨を取り除き、つぎに布を粘土円筒からはがす。

② 粘土円筒の分割

粘土円筒内部にヘラ状工具を入れ、広端側から狭端側に向かって切り込みを入れる。一定程度乾燥させた後、粘土円筒を4分割する。分割後、広端に指頭押圧による押圧波状文を施文する。

その後、生瓦を乾燥、焼成して完成にいたる。

なお、凸面の付着物には注目すべきものがある。1点の平瓦凸面には、広端から11.0cm付近に白色の付着物が認められ、ほぼ同じ位置に幅1.0cm弱の横方向の赤い線が長さ16cmにわたって付着し、一部、白色付着物の上ののる(標本57:図版10-4)。この赤い線は、その位置や範囲からみて、日本の軒平瓦凸面の顎部付近に認められる、いわゆる「朱線」と同じく、瓦座や茅負などの建築部材に塗られた赤色顔料が瓦に付着したものと考えられる。すなわち、この平瓦は押圧波状文をほどこした広端を軒先に向けて軒平瓦として使用され、広端側を11.0cm程度、瓦座の役割を果たす部材から出して葺かれたことを示している。また、白色付着物は建物の壁に塗られた漆喰などの可能性もある。これらの付着物は、金嶺寺遺跡の建物のなかに、白壁で朱塗りの建物が存在した可能性を示しており、建物の格、性格を知ることがかりになるものと考えられる。これらの付着物に対して、蛍光X線分析などの理化学的な材料分析がおこなわれることを期待したい。

(4) そのほか

このほか、文字瓦が2点、軒平瓦が1点出土している。文字瓦のうちの1点は、平瓦凸面の狭端ないし広端付近にヘラ状工具で文字を刻したヘラ書き瓦である(図版4-5)。端部側を下に向けた場合、まず、左から右へ平行に4本の横画を入れる。一番上の横画が一番長く、2番目、3番目の横画は徐々に短くなるが、一番下の横画を長く延ばし、ちょうど、「三」の一番上に最も長い横画を足したようになる。つぎに、4本の横画を貫くように、上から下(端部側)に向かって縦画を入れている。平瓦としての特徴は他の平瓦と共通しており、凸面に横ナデをほどこし、凹面に布圧痕を残す。模骨痕や粘土継ぎ目は認め

られない。端部は横ナデをほどこし、凹凸両面との間に狭い面取りをほどこす。

このほか、『報告』には「令使」のヘラ書きを刻む瓦が記載されているが、未見である。

軒平瓦は瓦当面に三ないし四重弧文をほどこしたのち、上から2番目の弧線上に櫛状工具を用いた右上がりの刻みをほどこし、瓦当下部を下から押しつぶしたような、いわゆる「コイル状」とよばれる圧痕が残る（図版4-3）。段顎風で顎部裏面は緩やかな曲面をなす。『報告』には未掲載である。遼代ごろまで下がるものであろう。

3. 先行研究との比較

王飛峰氏により、三燕時代の軒丸瓦の詳細な研究がおこなわれていることは冒頭で触れたとおりである（王飛峰2012）。王氏は軒丸瓦の製作技法についても詳細に検討しているので、ここでその内容を説明し、われわれの調査成果と比較検討したい。

王氏は、軒丸瓦の製作技法の分析に当たり、遼寧省文物考古研究所の協力により三燕時代の軒丸瓦の標本を調査したと記しており、その成果に基づき製作技法の分析、製作工程の復元をおこなったとしている。調査対象とした資料について具体的な記載がないため、金嶺寺遺跡出土軒丸瓦のみを対象としたのか、それ以外の資料も対象としているのかなどに関しては不明であるが、その製作技法に関する記載内容はわれわれの調査成果とほぼ共通しているといつてよい。

王氏は、三燕時代の軒丸瓦の製作技法の主な特徴として、瓦当嵌め込み（「套接法」）により瓦当部粘土を接合すること、円筒不要部切り離しにより軒丸瓦を製作することを示した後、以下のような工程を復元する。なお、内容を理解しやすく、かつ検討しやすくするため、王氏の記載の順に箇条書きにして番号を付ける等の変更をおこなった。この変更により王氏の論の意図がかえって正確に伝わらないようであれば、筆者の責に帰する。

（1）粘土の選択（「選料和泥」）

胎土、色調、焼成は「泥質灰陶」で大きい砂粒を含まず、均質なものを選択する。在地の土質と一致し、地元で取れた粘土を選択している。

（2）瓦当部粘土製作（「制作当面」）

- ① 篋を使って施文する。瓦当部粘土は外縁以外の円形部分（「圓餅部分」）である。瓦当裏面に手の圧痕が残ることから、瓦当部粘土製作時は篋が下、粘土が上の向きである。
- ② 瓦当裏面に叩き（「拍泥法制」）をほどこす。不均等に圧力がかかり瓦当面にヒビや割れが生じたものがある。

（3）瓦当嵌め込み（「套接筒形器」）

- ① 「泥条盤築」⁽⁶⁾によって製作した粘土円筒に瓦当部粘土を篋ごと嵌め込む。このと

き、すでに玉縁部（「瓦舌」ないし「瓦唇」）が作られている。

- ② 箆ごと嵌め込むため、瓦当外縁の高さは基本的に箆の厚さと同じになる。
- ③ 粘土円筒の製作は、麻布をかぶせた模骨の周囲に粘土紐を巻き付ける（「平行盤築」）。
- ④ 粘土円筒の広端と玉縁部を除く狭端の直径はほぼ同じである。

（4）円筒不要部切り離し（「切除筒形器」）

- ① 粘土円筒完成後、模骨を取り外し、円筒不要部を切り離す。切り離した半円筒は単独の丸瓦に、瓦当部粘土が接続したもう一方の半円筒は、軒丸瓦の丸瓦部になる。
- ② 円筒不要部切り離しには、竹、木ないし金属製のヘラ状工具（「刀具」）を用いる。
- ③ 粘土円筒半截は、円筒の内側からおこなう。
- ④ 粘土円筒半截の切り込みと瓦当裏面下半の突帯上面切り離しの切り合い関係は、両方がある。工人の習慣によって異なる。
- ⑤ 粘土円筒半截は瓦当部側からおこなう。
- ⑥ 瓦当裏面下半の突帯上面切り離しの切り込み方向は、左右両方がある。工人と切られた円筒の相対位置による。右手で切ったか、左手で切ったかの違いである。
- ⑦ 粘土円筒半截の切り込みの深さは、器壁の1/2、1/3程度。瓦当裏面下半の突帯上面切り離しは、全体を完全に切る。
- ⑧ 円筒不要部切り離しは、粘土円筒の一定程度乾燥後で、完全に乾燥する前におこなう。

（5）乾燥、焼成（「晾干焼制」）

これらの検討を踏まえ、王氏は、三燕時代の軒丸瓦の突帯上面切り離しに竹・木ないし金属製のヘラ状工具を用いる技法は、従来の技法と明確に異なり、三燕時代の軒丸瓦に独特なものである、とする。

王氏が指摘する製作技法の痕跡、それを基に復元された製作工程は、おおむねわれわれの調査成果と一致しており、王氏の分析の正確さを物語っている。しかし、われわれの調査成果と異なる点もあるので、以下に列挙する。

（1）、（2）-②について、金嶺寺遺跡出土のそれぞれの瓦の胎土がほぼ一致することは確認したが、地元の粘土の情報をもっていないので不明である。瓦当裏面の叩き（「拍泥法制」）については意味を解しがたい。われわれの調査では、瓦当裏面には指頭によると思われる圧痕による微妙な凹凸が多数残ることから、指頭によるナデないし押圧によって箆の上に粘土を押し付けて瓦当部粘土を成形した、と考えた。

（3）-④について、すでに説明したとおり、われわれが調査した資料は、粘土円筒の広端から玉縁部に向かってわずかに直径が細くなっていくものが多く、王氏の指摘とは異なる。

(4)－①については、誤読かと思ひ何度も原文を読み返したのであるが、王氏は、(3)瓦当嵌め込みの工程と、(4)粘土円筒から模骨を外し、円筒不要部を切り離す工程を明確に分けて(3)→(4)の順に記述しており、工程の先後関係としては、模骨が中に残ったままの粘土円筒と瓦当部を接合し、粘土円筒を半截しない状態で模骨を外す、と理解するしかない。王氏の復元案の根拠となる資料がどこかに存在し、われわれはその資料を調査していない、と考えるしかないので、これ以上のコメントは差し控えたい。

(4)－③・⑤・⑦については、金嶺寺遺跡出土軒丸瓦の筒部側面にはヘラケズリがほどこされ、分割断面、分割破面のいずれも残らないため、軒丸瓦については、粘土円筒半截の切り込みの方向、深さは不明である。筒部側面に残るヘラケズリ痕跡を、一度に円筒を切断した分割断面と考えた場合、切り込みの深さは側面全体を完全に切断する深さとなることや、粘土円筒外側から切り込んだ痕跡を残すものがあることから、王氏の説明とは異なる。王氏が説明する切り込みの深さに近いものとしては、瓦当側面に残る浅い切り込み痕跡があるが、これは粘土円筒外側から、瓦当部側に向かってほどこされている。

なお、王氏が三燕時代の軒丸瓦の独特な方法とした、突帯上面をヘラ状工具によって切り離す方法であるが、こうした技法は楽浪土城出土軒丸瓦にも認められることが指摘されており(井内潔1976。中村氏による軒丸瓦の接合技法分類のA3a式。中村2012)、三燕時代の独特な方法とは言い難い。このことは、後述するように、金嶺寺遺跡出土瓦の技法が楽浪地域の影響を受けた可能性を示唆するてがかりとなる。

以上のように、王氏による三燕時代の軒丸瓦の製作技法復元案は、われわれの調査成果と異なる部分がある。しかし、王氏が調査対象とした三燕時代の軒丸瓦の標本の内容が不明である以上、われわれが調査していない資料を根拠としている可能性も考えられる⁽⁷⁾。ぜひとも、王氏には調査対象とした瓦を具体的に明らかにされることを希望したい。今後、機会があればさらに類例の調査をおこない、以上にあげたような疑問点についてさらに検討を加えたい。

4. まとめ

(1) 金嶺寺遺跡出土軒丸瓦の位置づけ

軒丸瓦の出土点数からみて、金嶺寺遺跡所用の主な軒瓦がⅡA・ⅡBであることはほぼ確実である。また、軒丸瓦、丸瓦については、製作技法がほぼ同じであり、平瓦についても基本的な製作技法は共通する。また、胎土、焼成、色調の特徴も一致する。したがって、これらの瓦の製作に当たったのは同じ系譜を引く技術をもつ工人集団であり、単一もしくはごく少数の工房による製品である可能性が高い。おそらく、製作期間もそれほど長くなく、短期間に生産されたものであろう。全ての軒丸瓦において範傷が相当進行しているこ



図22 朝陽古城北大街出土Ba型(上)と金嶺寺遺跡出土ⅡA(下:標本36)

とも注目され、金嶺寺遺跡のために新たに作られた範ではなかったことが推測される。おそらく、範傷が少ない段階の同範瓦の供給先が別に存在するものと考えられる。

先述のとおり、遼寧省文物考古研究所が2003～2004年に実施した、朝陽古城北大街の発掘調査では、三燕時代の龍城宮城南門と推定される遺構を検出するなど大きな成果があり、3～6世紀の軒丸瓦が出土した。まだ正式な報告書が刊行されていないため、詳細な情報は不明であるが、出土した3～6世紀の蓮華文軒丸瓦の一部について、2006年に万雄飛氏、白宝玉氏が報告をおこなっている(万雄飛・白宝玉2006)。この報告によれば、A型からE型に分類される蓮華文軒丸瓦のうちのB型については、「朝陽北票の金嶺寺建物跡でB型と完全に一致する蓮華文瓦当が出土している」(万雄飛・白宝玉2006:310頁)とされている。

掲載されている写真から判断する限り、朝陽古城北大街で出土した軒丸瓦の「Ba型(04CL③:3)」は本稿におけるⅡAと極めてよく似ており、一部の範傷の位置も一致するので、同範である可能性がきわめて高い(図22)。ただし、掲載されている写真では、金嶺寺遺跡出土のⅡAのすべての個体に認められる範傷が生じていないようにもみえる。同範関係および範傷進行の確定には実物照合による詳細な調査が必要であるが、もし、これが事実であれば、朝陽古城北大街出土Ba型は金嶺寺遺跡出土ⅡAより確実に古い段階の製品となる。少なくともⅡAについては、範傷の少ない段階の供給先の一つが龍城であった可能性が考えられ、本来は龍城への供給を目的として範が作成された可能性もある。

万雄飛氏、白宝玉氏によれば、龍城における大規模な築城活動はおもに3回あり、前燕の341年に龍城築城、後燕の397年から407年にかけて龍城の大規模な改修と拡張、さらに北魏の熙平二年(517)に大規模な補修がおこなわれたとされている。このうち、「B型」は前燕あるいは後燕の時代のものとされている。金嶺寺遺跡出土軒丸瓦のⅡAは、龍城へ供給された「Ba型」と大きく隔たらない時期に製作されたと考えられ、範傷進行が確定できれば、その前後関係も把握可能である。ⅡAは金嶺寺遺跡出土軒丸瓦のうち主要な種の一つであり、その製作年代は、金嶺寺遺跡の時期をうかがう上で重要な位置を占める。朝陽古城北大街の正式な調査報告書の刊行が俟たれる。

(2) 金嶺寺遺跡出土軒丸瓦の特徴

金嶺寺遺跡出土軒丸瓦の製作技法について分析をおこなってきたが、注目される点や特徴的な部分のみ、列挙しておく。

① 文様、範について

- ・文様を彫りつけた円形の木製範によって施文し、多数の範傷が生じていること。
- ・範は瓦当外縁内側までで瓦当外縁にはかぶらないこと。
- ・文様は、六弁蓮蕾文を1本の輻線で区画し、輻線から派生した複雑な幾何学文を配するものがほとんどであるが、四弁蓮蕾文を3条1組の輻線で区画するものも混じること。
- ・瓦当外縁の外側、丸瓦部側面（および玉縁部先端）に指頭によると推定される押圧をおこない施文すること。
- ・龍城に比定される朝陽古城北大街から、同範品である可能性の高い資料が出土していること。

② 製作技法について

- ・丸瓦部の成形は、模骨を使用した粘土紐巻き付けなし積み上げによること。
- ・基本的な製作は、模骨を取り外した粘土円筒に瓦当部粘土を接合した後に、粘土円筒を半截し不要部分を切り取る円筒不要部切り取り式によること。
- ・瓦当部の接合は、瓦当部粘土を粘土円筒に嵌め込んでおこない、瓦当外縁は丸瓦部広端で作ること。瓦当部粘土の下に範が残ったままの状態、上から粘土円筒をかぶせるように嵌め込んだと考えられること。
- ・粘土円筒内側の広端付近にヘラ刻みをほどこすなどして加工し、瓦当部粘土嵌め込み前に接合部補充粘土を貼り付けること。
- ・接合部補充粘土を瓦当裏面側に密着させるための加工はおこなわれず、隙間が空くものが多いこと。
- ・瓦当外縁上面に粘土継ぎ目が認められるものが多いこと。
- ・瓦当部粘土嵌め込み後、瓦当外縁内側にナデツケをほどこすものがあること。
- ・円筒不要部切り取りには、粘土円筒半截、円筒不要部先端切り離しのいずれにもヘラ状工具を用いること。

この瓦が龍城造営の4世紀中頃以降に製作されたとすると、中国のほとんどの地域の軒丸瓦はすでに、半截した丸瓦部に瓦当部粘土を接合する半截丸瓦接合式を採用している。井内潔氏、井内功氏、谷氏、中村氏らは、楽浪郡には円筒不要部切り取り式が存在するとし、中村氏は、313年の楽浪郡滅亡後、魏晋期にも在地土器工人により技術が存続したと想定している（井内潔1976、井内功1977、谷1984、中村2012）。また、瓦当部粘土嵌め込みの

製作技法についても井内潔氏、井内功氏、谷氏は楽浪郡に存在することを指摘している（井内潔氏による「瓦当嵌め込み法」。井内潔1976。谷氏によるA2技法。谷1984）⁽⁸⁾。金嶺寺遺跡出土軒丸瓦の製作技法は、楽浪郡と何らかの関係が推定されよう。しかし、瓦当部粘土嵌め込み前に粘土円筒内側に接合部補充粘土を貼り付け、嵌め込み後に瓦当裏面の隙間を密着させるための工夫をおこなわない点は、いまのところ類例を見出すことができず、きわめて特徴的なものといえる。この点は三燕時代の遼西地域の瓦製作技術の系譜を考えるうえで貴重ながかりとなる。

軒丸瓦の文様については、蓮蕾文が高句麗に多くみられ、遼西地域から高句麗に伝わったとする説と、その逆の流れを想定する説がある。この点については、遼西地域の軒瓦の事例が増加した段階で検討することとしたいが、少なくとも、金嶺寺遺跡出土軒丸瓦のように、蓮蕾文間に複雑な幾何学的文様を加えたものは、現時点では遼西地域に限定されるようである。製作技法と同じく、この文様の特徴も遼西地域の瓦の系譜を考えるてがかりとなる。

平瓦凸面の付着物が注目されることはすでに説明したとおりである。平瓦の広端に押圧波状文をもつ瓦は、軒平瓦として使用された可能性が指摘されてきたものの、具体的にどの位置に使用されたのか明らかではなかった。今回、凸面に建物の一部に塗布したと考えられる付着物を確認した。押圧波状文をもつ広端を軒先に向け、軒平瓦として使用されたことを具体的に示す物的証拠となる。

なお、金嶺寺遺跡の区画塀周囲や石槽から「紅彩白灰」が出土しており、田立坤氏は「彩絵」（壁画？）が存在した可能性を指摘する（田立坤2014）。「紅彩白灰」の状態や出土量などが詳らかでないため「彩絵」の有無については不明であるが、少なくともその一部は、建築部材に塗られた顔料や壁に塗られた漆喰などである可能性がある。

以上、金嶺寺遺跡出土軒丸瓦について、その製作技法を中心に検討をおこなった。その後の検討にも耐えるよう、写真、模式図を極力多用し、製作技法を復元した根拠をなるべく具体的に示すよう心がけたつもりである。一方で、遼西地域やその周辺地域の資料数が少なく類例との比較検討が不十分であるため、従来から指摘されている高句麗の蓮蕾文軒丸瓦との関係や、遼西地域における軒丸瓦の製作技法や文様の系譜の追求、瓦の生産と供給の実態などは明らかにできなかった。また、瓦当文様を範ごとに分類し、範傷進行も確認できたのであるが、製作技法の変化がみられなかったことや、他遺跡出土の同範例の確認ができなかったことから、分類を十分に活かすことができなかった。積み残した課題はまだ多い。しかし、本稿が今後の遼西地域や周辺地域における瓦研究に幾許かでも寄与することができれば、望外の喜びである。

謝辞 本稿をなすに当たっては、遼寧省文物考古研究所の李向東前所長、呉炎亮所長、李新全副所長、李龍彬副所長をはじめ、多くの方々のご協力を得た。末筆ながら、深甚の謝意を表したい。

註

- (1) 本稿は共同執筆者による遺物観察に基づく検討結果を清野がとりまとめたものである。
- (2) 高句麗で多く出土する、弁形が杏仁形や水滴形を呈する蓮華文について、安岳3号墳など高句麗壁画墓の壁画にみられる蓮華文の表現と比較し、蓮の蕾を横からみた状態をモチーフにした文様とみなして蓮蕾文とよぶことが一般的である。遼寧から出土する同様の弁形の蓮華文も、日本では蓮蕾文と称されている。本稿でも、既往研究との混乱を避けるため、仮にこの文様を蓮蕾文とよぶこととするが、遼寧の事例を蓮蕾文とよぶのが妥当であるかどうかは、本来、別途の検討が必要であると考え。また、弁がそれぞれ蓮の蕾を表すならば、そもそも「弁」と表現すべきではないが、本稿では説明の便宜上、「弁区」、「六弁蓮蕾文」などとよぶことにする。
- (3) 丸瓦部側面全体が実は分割面で、分割破面を残さず側面を完全に切り離した可能性も残る。ただし、その場合、わずかな失敗もなく、すべての軒丸瓦について、粘土円筒をほぼ1回で半截し、その後の調整の必要もほとんどなかったことになり、その可能性は低い。
- (4) 布を玉縁部側から抜いても、同様の痕跡を残すことがあり得る。しかし、布は口の広い広端側から抜いた方がはるかに楽であり、合理的であると考えられる。
- (5) このほか、瓦当外縁の外側にも粘土を薄く貼り足したような継ぎ目が認められるものもある（標本11：図版8-4）瓦当外縁付近には複雑な調整がおこなわれたようである。
- (6) 王氏は「泥条盤築」と表現しているが、土器の製作技法と同様の技法、すなわち、模骨を用いずに粘土紐を巻き上げつつ叩き板と当て具を用いて表面を調整し、粘土円筒を成形する技法ではない。
- (7) 王氏の分析が金嶺寺遺跡出土瓦の観察に基づいているとすれば、軒丸瓦の丸瓦部と丸瓦を一部、混同している可能性があるのではないかと、との印象を受ける。
- (8) 中村氏は、楽浪郡の軒丸瓦で谷氏A2技法と分類したものは、「厳密には別作りした丸瓦に瓦当を嵌め込んだものではない」とする（中村2012：98頁）。

引用・参考文献

〈日本文〉

- 井内功 1977「楽浪郡時代の造瓦に関する覚書」『井内古文化研究室報』18。
- 井内潔 1976「楽浪郡時代の標識的造瓦技法」『井内古文化研究室報』16。
- 今井晃樹 2010「湖東式関連瓦2—中国における軒平瓦の変遷—」『古代瓦研究V』奈良文化財研究所。
- 大脇潔 1991「丸瓦の製作技術」『研究論集IX』奈良国立文化財研究所学報第49冊。
- 大脇潔 2005「老北京故同薨紀行 東アジアにおける軒平瓦の変遷」『古代撰河泉寺院論攷集』第2集。
- 小池伸彦・川畑純・清野孝之・森先一貴・諫早直人 2014「遼寧省北票市金嶺寺遺跡及び大板営子出土遺物の調査」『奈文研紀要2014』。
- 谷豊信 1984「西晋以前の中国の造瓦技法について」『考古学雑誌』第69巻第3号。
- 中村亜希子 2012「瓦の東方伝播—楽浪瓦の再検討—」『中国考古学』第12号。
- 向井佑介 2005「押圧波状文平瓦の源流」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』。
- 桃崎祐輔 2005「高句麗太王陵出土瓦・馬具からみた好太王陵説の評価」『海と考古学』海交史研究会考古学論集刊行会編、六一書房。
- 桃崎祐輔 2009「高句麗王陵出土瓦・副葬品からみた編年と年代」『高句麗王陵研究』東北亜研究財団企

画研究20。

遼寧省文物考古研究所編 2004『三燕文物精粹（日本語版）』奈良文化財研究所。

〈中国文〉

王飛峰 2012「三燕瓦当研究」『边疆考古研究』第12輯。

辛岩・付興勝・穆啓文2010「遼寧北票金嶺寺魏晉建築遺址発掘報告」『遼寧考古文集（二）』遼寧省文物考古研究所編。

田立坤 1996「棘城新考」『遼海文物学刊』1996年第2期。

田立坤 2014「金嶺寺建築址為“鹿廟”說」『慶祝張忠培先生八十歲論文集』吉林大学边疆考古研究中心編、科学出版社。

万雄飛・白宝玉 2006「朝陽北大街出土の3～6世紀蓮華瓦当初探」『東アジア考古学論叢—日中共同研究論文集—』奈良文化財研究所・遼寧省文物考古研究所。

李新全 1996「三燕瓦当考」『遼海文物学刊』1996年第1期。

挿図出典

図1：遼寧省文物考古研究所編2004

図2：辛岩・付興勝・穆啓文2010

図3：著者作成

図4・6～10・17～21：写真—栗山雅夫撮影 図—著者作成

図5・11～14、卷末図版：写真—栗山雅夫撮影

図15：著者撮影

図16：著者作成

図22：上写真—万雄飛・白宝玉2006 下写真—栗山雅夫撮影

図23：著者作成

（図4、6～10、17～21はいずれも縮尺1/4）

表1 軒丸瓦各部計測表

型式	a.瓦当直径	b.弁区直径	c.中房直径	d.外縁幅	e.外縁高	f.瓦当側面幅	g.全長	h.玉縁長	重量	標本番号
I	171	123	44	14~17	15	30			0.707	標本16
II A		126	47	13					1.465	標本4
II A	174	127	47	15	15	27			1.328	標本8
II A	175	127	46	10~17	16	33			0.787	標本15
II A			43	13	14	39			0.781	標本18
II A	(175)	(124)	43	11	19	49			0.750	標本25
II A									0.332	標本26
II A									1.010	標本35
II A	169	129	46	15	18	30			1.107	標本36
II A				15	17	45			0.267	標本38
II A				16	18				1.406	標本39
II A				16	19	32			0.259	標本40
II A				15~17	18	38			0.326	標本42
II A				12	17				0.343	標本43
II A	162	128	44	10	13	39			1.041	L-02
II B	172	124	46	12~14	16	41	528	55	4.957	標本⑥
II B	170	125	48	8	16	35	557	61	4.936	標本1
II B	175			12	20	35			2.280	標本3
II B	176	126	51	16	19	32			1.471	標本7
II B	179	125	48	16	17	35			1.758	標本11
II B			(43)	15	18				0.546	標本20
II B			(46)	14	18				1.166	標本21
II B		131	48	12~14	17	25~32			0.693	標本24
II B				15	20	35			0.413	標本29
II B				20	18	31			0.213	標本41
II B				15	19	36			0.406	標本45
II B	178	125	48	15	19	30			0.721	L-01
II C	(174)	(135)	48	13	19	39			0.618	標本23
II C		137	48	13	20	43			0.714	標本32
II D	171	123	37	11	16				1.686	標本5
II D	173	123	39	12	15				1.557	標本10
II D	170	124	35	13	17	38			1.221	標本14
II D	(170)	123	39	11	18	40			0.839	標本22
II D	175	123	38	12	18	38			0.939	標本27
II D			38	15	14	32			0.428	標本33
II D	(172)	118	39	15	19	(43)			4.699	標本50
II E	175	126	(40)	13	19	35			0.824	標本17
II F	163	125	49	12~14	11	49	535	59	4.929	標本⑤
II G				13~15	19	33			0.241	標本31
II H	(173)	123	54	10~13	15				1.061	標本13
II H	(170)	123	54	11	17	35			0.519	標本19
II I	168	124	49	12	14	43			1.690	標本44
II 仮J	170	123	52	9	19	38			1.702	標本9
不明							559	65	4.652	標本①
不明							543	47	4.704	標本2
不明				15	20	43			0.236	標本30

凡例：型式名は「II型式A種」を「IIA」のように表記。単位はmm、重量のみkg。()は復元推定値。
各部位の計測位置は次ページ下の図23参照。

表2 丸瓦各部計測表

型式	a.全長	b.筒部長	c.玉縁長	d.広端直径	e.狭端直径	f.厚さ	重量	標本番号
長	490	438	52	172	167	19~30	4.547	標本49
長	513	455	58	170	110	16	3.253	標本52
中	436	395	41	170	168	20~26	3.952	標本②
中	436	396	40	181	165	24~31	5.299	標本③
中	420	385	35	197	170	23~30	5.004	標本51
中	438	395	43	180	125	33~39	5.518	標本53
短	400	360	40	187	169	20~31	4.094	標本47
短	393	345	48	180	169	21~33	4.116	標本54
短	392	347	45	186	171	19~32	3.904	標本56

凡例：型式名は「長タイプ」を「長」のように表記。単位はmm、重量のみkg。各部位の計測位置は本ページ下の図23参照。

表3 平瓦計測表

a.全長	b.広端幅	c.狭端幅	d.厚さ	重量	備考	標本番号
441	400	351	19~25	7.729	押圧波状文が明瞭	標本55
461	392	350	24~29	8.020	凸面に赤・白色付着物	標本57

凡例：単位はmm、重量のみkg。各部位の計測位置は本ページ下の図23参照。

表4 ヘラ書き瓦計測表

残存長	残存幅	厚さ	重量	備考	標本番号
100	217	22	0.577	凸面狭端寄りにヘラ書き「丰」	標本46

凡例：単位はmm、重量のみkg。

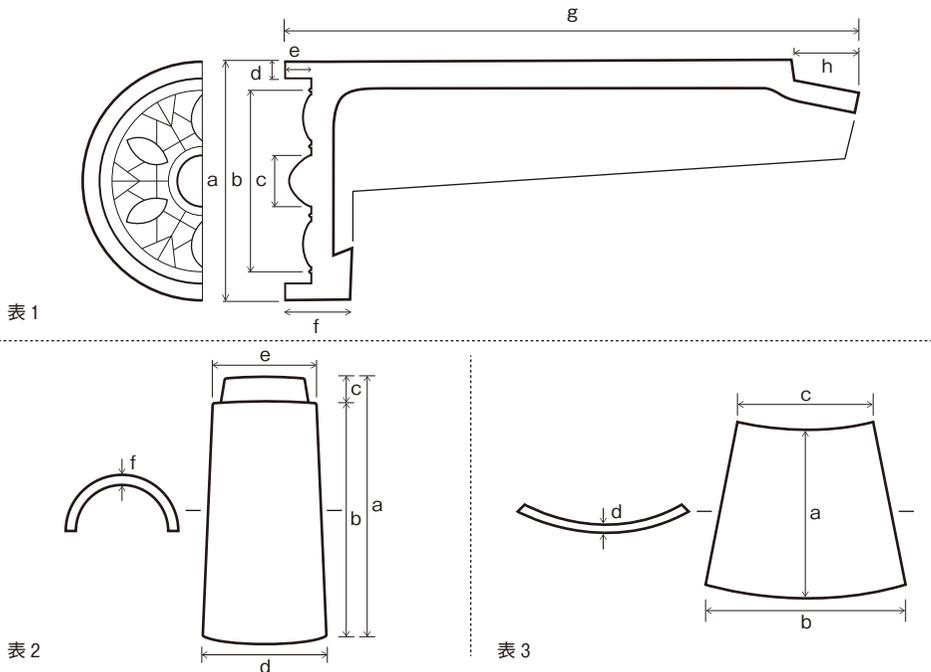


図23 瓦の各部位計測位置



1. I型式 (標本16)



2. II型式A種 (標本L-02)



3. II型式B種 (標本11)

図版1 金嶺寺遺跡出土 軒丸瓦 1



1. II型式C種 (標本32 [標本34と接合])



2. II型式D種 (標本14)

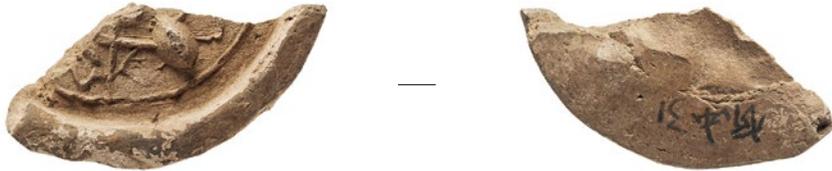


3. II型式E種 (標本17)

図版2 金嶺寺遺跡出土 軒丸瓦2



1. II型式F種 (標本⑤)



2. II型式G種 (標本31)



3. II型式H種 (標本13)

図版3 金嶺寺遺跡出土 軒丸瓦 3



1. II型式I種 (標本44)



2. II型式仮J種 (標本9)



3. 軒平瓦 (遼代か)



5. ヘラ書き瓦 (標本46)



4. 瓦当外縁内側の状況 (標本⑤)

図版4 金嶺寺遺跡出土 軒丸瓦4、軒平瓦、ヘラ書き瓦



1. 丸瓦部完存（Ⅱ型式B種：標本1）

2. 丸瓦部完存（Ⅱ型式D種：標本50）

図版5 金嶺寺遺跡出土 軒丸瓦5



2. 丸瓦部完存、瓦当部剥離（型式不明：標本2）



1. 丸瓦部完存、瓦当部剥離（型式不明：標本①）



3. 瓦当裏面、接合部の状況（標本7）

図版6 金嶺寺遺跡出土 軒丸瓦6



1. 瓦当部粘土の形状、瓦当裏面の痕跡（標本25）



2. 瓦当部粘土の形状、瓦当裏面の痕跡（標本16）



3. 瓦当部粘土の形状、瓦当裏面の痕跡（標本10）



4. 接合部補充粘土、丸瓦部凹面の加工（標本14）



5. 円筒不要部切り離し痕跡（標本44）



6. 円筒不要部切り離し痕跡（標本18）



7. 瓦当裏面下半の突帯上の切り離し痕跡（標本23）



8. 瓦当裏面と突帯上の切り離し痕跡（標本L-01）

図版7 金嶺寺遺跡出土 軒丸瓦7



1. 瓦当外縁内側と瓦当面のナデツケ (標本29)



2. 瓦当外縁内側のナデツケと范傷 (標本44)



3. 瓦当外縁上面の粘土継ぎ目 (標本25)



4. 瓦当外縁上面の粘土継ぎ目 (標本11)



5. 瓦当外縁内側の指頭圧痕 (標本15)



6. 接合部補充粘土の状況 (標本⑥)



7. 外周圏線外側の范傷 (標本17)



8. 瓦当裏面、接合部の状況 (標本50)



1. 丸瓦完形（長タイプ：標本52）



2. 丸瓦完形（中タイプ：標本②）



3. 丸瓦完形（短タイプ：標本48）



4. 丸瓦部側面と凹面の状況（標本3）



5. 丸瓦広端の調整（標本56）



1. 平瓦 (標本55)



2. 平瓦 (標本57)



3. 平瓦広端の凸面側の指頭押圧痕 (標本55)



4. 平瓦凸面の付着物 (標本57)

図版10 金嶺寺遺跡出土 平瓦